賀茂社記録

第四十九

832
97
305

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

832
97
305

群記類鑑抄出

上

49

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

帝国図書館蔵書
昭和十二年十月廿日

冠記類纂抄出上

目錄

神社局
御幸掛
行

国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

造営
山
宮遷
行幸

群記類鑑抄出上

目錄

神領
河付池
私幣
御幸付行啓

大正
7. 2. 2
購求

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

群記類鑑抄出上

造営

日本後記巻九大同四年己丑四月辛卯勅修造諸國
神社之状宣勅先訖而経渉年月未加修造自
今以後在所長官専當其事勤致修理其料度
者以神税充用無封之社宜用正税ニテ
百練抄云後嵯峨院仁治三年八月廿七日丁丑鴨社
正迁宮之當日社并年一度於別雷社者以破壊之其
朝之例云
園太暦記康永四年十月十一日天晴予除服出仕事

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

下申決之旨仍胡乱申述口実当仙洞
辞定地等依所労久不出仕有年怒之号相扶て
参仕之由申入了未刻参院之て依召入之参拝
定而先祭義造営之事可被命歟当冬人只四人也二人
幣等淫祀也仍可退座之議奏之列雖然也有其例
座匂論之但依例勅使随服人従神事有其例究
勅者忽以別勅被定之歟参殿下伺時宜之由
申入了先可後参之旨有 勅定
未剋等前賀茂社之事有御占長元之度中久後

貞享未申秋其弥之輩中之銭又尺中之其後次
有議奏而経前神主惟久正祝宣久後被補社務
若以十万足功程年内可造営御造営御占之事無
貞享年中為当職数久和与負年勘行社領之上去
寅人去違可致十万足御占会随件散
状事有御占之大略一同了仍例之随身
依例勅使神事之条存例之処覚悟之外
之一定何年何事之多仍延引歟之処
従神事之上議奏有其例仍後九月又沙汰
仙洞了 私云例文略之原本書之

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

氏副家及古之中

賀茂社餝始之事

寛永四卯季餝初

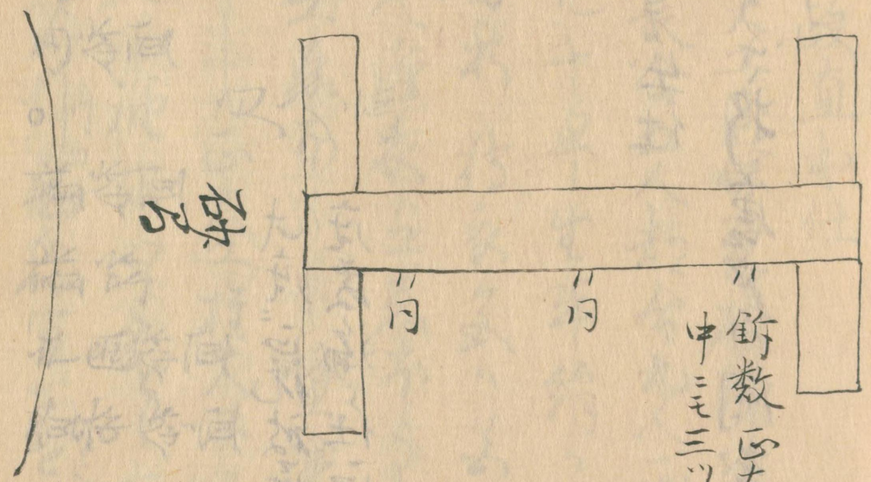
十月一日

祝屋

祝松下

祝北妻

正殿



国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

一氏人浄衣ニテ出仕

一社人狩衣うさ打唐戸ヲ開キ出仕勿論十年変ラス例

一僧両　改直ス仕

一大工　平大工権大工平棟梁権棟梁已上四人又ハ長右ノ長合五人打合九人平大工権大工狩衣袴ニ烏帽子ヲ平緒うさ打残ル分ハ浄衣ニ烏帽子ヲ平緒うさ打ち袴ヲ着ス

一正大工権大工小神一ツヽ有ル其唐戸ヲ引カ開キ別当ヲ入テ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

多留徐置く汲し三大立ニらも

一　右一枚横折

貴布祢く宣唐戸ゟ始ニ右ノ毛別而ゑれ汲テ貴
布祢く宣ニ汲指大立ニらもを

一　チヤウノヤニテ他ゟ大立うぢ楢皮擂潰酒を
毛飯ノキやら有ゟ

他ゟ三方せんぶ

生姜　生姜　たんこ
平切　三重　白はす　ダイコ
ゐり切　ゐり切　くわゐ　うき

何モヤウキ
土器ニ盛ん

右ニ大立横大立ひら折ゟ二重有ゟし猿ゟ七ん
ふりひら折ゟ三ツ重ナニ酒四半ト行

一　右ノ酒ゟ三種菜ゟ七人ニ生絹壱疋ツ別
当ゟも是モ右ニ大立横立ニらもをておそす
ゟそ有ゟそをそる不審

手万ニ仰而大工ヲ始メ納付ク布直衾
立ヌカラシニ右棟梁七人ノ内ヲ人ハ左ノ長右
ノ長ト中ヲ也又正大工権大工両棟梁権棟梁四人ニ
仰下ヌ
十月ニ天吉
一氏冬ヲ妙ヨシ氏家之ハ左棟ク
氏ハ何ヲ妙ヨシ氏ニ庄ヲ也ヌ宇老ヲシ月恵
中ヲ光廣ヲ奉ル元 中宮権 七務ヲ
新営ノ礼ニ参ヲレ日晩ヲ宵会ヲ庄ヲ恵希ヲ
社司正祢宜ハ位ヲ権ヲ方ニ立氏
一社ニ立ヲ二社ニ立ヲ易ヲシ二社立ヲ

宣下新始ノ事
右若ク茂氏副家又古之中ニ有ヲ也ラ筋
ヨ氏ヲシ許ヲ写当若之但右ハ氏
冬ヲシ写書ト見ヘ列氏冬ハ同氏副之父之
卒践祚来ヲ
ヨ時元禄十六癸未九

続日本紀桓武天皇延暦三年六月壬子遣ノ参
議近衛中将正四位上紀朝臣船守於賀茂大神社
奉幣以告遷都之由為十一月乙丑遣使修理賀

茂下上二社及松尾乙訓社ノ
秀吉公御代
一天正十九年 御造営 秀吉公依御願
台徳院秀忠公御代
一寛永五年 御造営
此度本社八社小社合屋ニ
諸司之紫宸ヨリ新規ニ
御勅大樹秀忠公御造営被仰付
清茂翁考

羽車
社ニ
遷宮之時ニ装束ヲ用ラルヽ事ハ
ヲ一度ニ絁布ヲ修ラル今制法ヲ改ラル

仰ノ事

四事記ニ曰四地神本紀曰大己貴神ニ
而冤妻妾而下行於筑紫ノ
活玉依姫ヲ為妻ニ是其始ナルヘシ

菅笠
神宮雑事記ニ雨儀ノ時奉覆神躰
太神宮儀殿ノ遷宮也ニ而乃降事波ニ如浚
志岡之遷宮時社頭遠ク
間乃雨弥倍ニ無間断仍以菅笠ヲ
仁義奉天儀殿仁渡御ニ坐之間御被并御裳

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

来神宝物等俗以湿損御
左右相殿乃御體同以湿気御坐之由
有職抄云御迁宮之時御幣串長三尺五寸廣一寸
脇六七分紙二枚ヲ四折下ハ二枚ヲ八折下ヲ五
十丁然ハ〻ヲ紙ヲ五ツ〻天
志御正體乎奉始天

神領

吾妻鑑巻第三 元暦元年 源朝臣御判ノ御下文ニハ壽永三年
四月廿四日壬辰賀茂社領四十一箇所任院廳御下文可
正武家狼藉之由有其沙汰 御下文ニハ四十二ヶ所トアリ二字ヲ誤ルヘキ
同巻第六 文治二年十月一日記云賀茂別當領出雲
國福田庄石見國久永保 ヒサナカノホウ 参河國小野庄等成御下
文被遣社家當宮事ニ品 頼朝也 御歸依異他之故也
左経記云寛仁元年十一月十三日丁巳賀茂行幸 先是依御
願以山城國愛宕郡永可奉寄賀茂御社之由有
命郡件郡内有靈社并宮城氷室等仍南限一条

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

大路以北西限東大宮大路与利以東東限吉田社并水
[redacted]北極郡界奉寄云々
清茂按寛仁行幸者十一月廿五日也依廿三日非也
一名小右記
野府記云寛仁二年十一月廿五日太政官符民部省
應以山城國愛宕郡捌箇郷四至東限延暦寺四至南限
奉寄賀茂上下太神宮事皇城北大路同末西限大
宮東大路同末北限郡堺御祖社肆箇郷賀茂郷小野郷
別雷社肆箇郷賀茂郷小野郷栗田郷栗野郷
錦部郷大野郷
賀茂郷和名抄云愛宕郡
右文書云賀茂社境内六郷河上大宮郷小山郷中
村愛宕郡云々散在櫟原野二瀬小野郷云南北散在之事同
幡枝在之
往古社家當知行之処今度小山郷有違乱之族者
以外次第之由所仰出候状如件
享禄二
十月廿一日
当所名主沙汰人中
乾連
長俊
兵本名
憲鑑嘲餘云上賀茂六郷不入本郷不入本郷
中兵本名トハ云リ乙ヨリ菩薩池ノ島岳本郷也
兵本郷小野郷一乗寺邊河上郷氏神ヨリ上
西賀茂ヲ云也大宮
郷中村郷小山郷已上六郷兵本
雅楽助詰也

日本記畧
西宮記ホ
皆寛仁
元年十月
ホ五日之事
ノリ

小右記云寛仁二年十月廿四日被奉寄賀茂上下
御社 後一条院年号
御トノ事一可定申之栗栖野小野二郷上下社司
各申但昨日下社司久清進解文可寄旧記皇卿
神初天降給小野郷大原御薗山也トノ亦栗栖野
可為下社之山有採桂葵山上之由先年給官府仍
件小野并栗栖野可為下社領者令仰下隆聖
御薗之山之記文可進之由申之處申云康保二年上
祢宜宅焼亡次焼失者又令仰云古人口傳不然無
記文如件解文并事趣又上下社司申亦初
被奉御封於上下御社之時上御社十四戸下御社
十戸又神戸教有增減上御社七十余戸下御社
五十余戸此間可奉一定之文除神山採葵山之外
山者不可奉寄欤被奉寄寄 伊勢太神宮之郡
格云官物舎之類又右近馬場氷室垣河義尊
呂池不可為奉寄欤件案内先以左少弁経頼
令申前太府之事也仍請處分経頼
来陣座傳前太府命云下社司進申文無一乖拠
又不延旧記但至栗栖野小野郷有採下社葵之山
為下社分可有便宜至小野郷可為上御社分
至于山ト不可寄非官物官舎之類也

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

可奉寄賀茂上下社卿之事

上社　賀茂卿　小野卿　大野卿　錦部卿

下社　栗野（クルスノ）卿　蓁（クヌギ）倉（クラ）

北畠准后廿二社記云仁伊勢以下諸社敷地何卿哉　答賀茂卿也然自中古分賀茂四卿今六卿也上古四卿若賀茂卿小野卿錦部卿大野卿以上四卿也然者以賀茂卿河上卿幸卿分為政錦部卿為中村卿又以大野卿

仁木宏卿小山卿分為仍今賀茂六卿之然若今當社敷地者河上卿也河上卿幸境者限大田社也

大田社者卿幸卿也

○賀茂社神領

九　美作國　倭文庄（シトリ）　河内南庄（四条坊門別宮社領云有頼朝卿下文元暦二年六月六日依資保訴申之見別宮社下）

（イニ河内庄）

森家沙文文治二年十月一日卿下知状ニ美作國市庄堺事トアリ

廿二　加賀國　金津庄　社中證文秀吉朝折紙ニ金津庄内拾ヶ村トアリ

八　播磨國　安志庄（イニ西）　便補保（社中沙文ニ三箇（イニ室）保ニ播州國塩屋庄トアリ）

森家沙文文治二年十月一日卿下知状ニ播州國網干濱トアリ

十六　周防國　伊保庄　矢鴻庄　林田庄　河内庄

松下數久兄久種ノ譲状ニ室河内庄トアリ

龜尸関

十四 伊与國 菊万庄 佐方庄 保イ

十七 能登国 土田庄 永正七三十四義元状社中ニアリ神領能州加茂庄之事
挑浦 トアリ挑ハ土田庄ノ事ナラム
社中證文秀吉ノ折紙ニ賀茂社領能州羽作郡内五ヶ村トアリ

五 遠江國 比木庄 落居濵 賀茂新宮社領ト遠江國濱松庄ノ内国部郷
笠名郷 雑掌忠茂申云々
後西院天皇嘉暦元年十二月廿日高時道
宗鑑自判之一通有之全文見新宮社部

十三 伯耆國 星河庄 稲積庄 和名抄伯耆國會見郡有湯川郷

十九 阿波國 福田庄

廿一 若狭國 宮河庄 矢代浦 大谷村 嘉禎三年ノ下知ニ
森家在之文暦二年御教書之出候ハ宮河保トアリ又宮河庄内
大谷村并矢代浦ト有之又宮河新保トアリ
嘉禎三年九月十五日ノ沙汰文ニ大谷畠氏見
建長四年十月八日ノ證文ニ若狭国多烏浦漁猟之事トアリ
越後国ニモ亦有宮河庄吾妻鑑ニ見ヘタリ奥ニ記之

六 丹波国 由良庄 御油新庄 ゴユノシンジャウ
此神領皆地三十八石余若狭国ニ見ヘタリ御油新庄ノ事ハ後白河勅願ニテ
由良庄同事ト思ハル
貴布祢社御燈油料ニ御寄附ニ重忠子孫可お待ノ見社考ヘ

私市庄 元暦二年六月六日有頼朝公御下文依資保訴申ニ
四条坊門別宮社神領ニ

二 美濃國 旌長庄

四 冬河國 小野田庄 吾妻鑑ニ為小野庄

石見国 久永庄 吾妻鑑ニ為久永保

一 近江國 舩木庄 安堂雲河御厨 吾妻鑑ニ安堂雲河御厨之内
藤江村トアリ
延徳三年十二廿六社中證文ニ舩木庄号賀茂庄
郡舩木庄又明應三十一八沙文ニ同ク

伊勢國 平野庄

三 尾張國 玉井庄 高畠庄

七 摂津國 米谷庄 米ハ久ヨリ
此事カナノ沙文社中ニアリ注進記ニ出文化天皇ノ御夢
想ニヨリ九条殿ノ寄進ノ由告アリシヨリ勅使ノ立ラレサカシ求奉ラル故勅文庄ニアリ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

但馬國　矢根庄　社務記教久條下又家平條下ニ出

十三　出雲國　福田庄　松下數久兄久種ノ譲状アリ又親長記文明八年三月廿三日記ニ棟久下向出雲國之旨載之

十六　和泉國　深日庄　箱作庄

十七　淡路國　佐野庄　生穂庄

十　備前國　山田庄　竹原庄

廿三　越中國　新保庄　仁堀庄　尾張保　新保庄森貞久知行之由見親長記文明七年九月廿日記

十一　備後國　有福庄　新保庄ノ内ニ新保御厨トアリ

信濃國　捧庄

山城國　大奈良御　水主御　冨野御

大奈嶋御　草内御　奈良木御

和名抄山城國久世郡之内　那羅水主那紀冨野等ハ三ノ乙ニ奈嶋草内ノ二ツハミヘス・山城名勝志曰綴那紀御　和名抄云久世郡　名木河ハ雲御　抄云山城

十八　紀伊國　紀伊濱御厨

已上五十五箇所

右載于有職抄宝徳三年八月十七日権祢宜従四位下増平自氏人西池兵部少輔吉元平令借用書写之云々

右一三三付頼朝下文ノ次第其余漏之

越後国神領記

・越後國亦有宮河庄吾妻鑑文治二年三月十二日記云越後國宮河庄前祈院御領預所前治ノ卿云々

日上

・吾妻鑑文治二年三月十二日記云越後國石河庄　賀茂社領

讃岐国神領記

・社務補任記氏久之任中讃岐ノ御米ノ残ヲ皆以氏人中ヘ出サルトアレハ讃岐ニモ神領アリト見ヘタリ　又社中證文永

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

正十七四十六景昌請文ニ賀茂御社領讃岐國一乃濃池之
内トアリ

●往来田之事

按するに往来田のことまれる多池考
へ出せし事と見えて元亨乃比の往来
田勘落乃ことゆえく民人ホ当まへ主張し的
きるう的乃さうもなるうしかハ奥和四年五
月六日社乃ら場すて除付のけいえ十当
とをもて賓一結きろ元亨年中氏
人中往来勘落のおりの立証を果しと社地

氏人ホ申
小林ニ至
ときりぬ一又きろ打
ら見えろハ年号寛喜記なのこと
ろうこの
證記 社記ニく一ツ書かし宝永元年九月出掛し時
写し

●系図 教人ホ申ス伝
奥和四年五月六日
ニく十当の競ろ打ら社乃ら場ろ成りの
氏人中の立証を果すに社司ホ申ス伝
親長記文明八年八月廿六日の晴伝今度伝社司

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

訴訟等ヲ向社ニ放火衆科ニ不經所訟而第ホ一ヲ
被石工ヲ殺生造営ヲ京ニ人等事者ヲ殺石
放往来田ヲ造営ヲ若可存之中ニ仍テ遂惡業
仍テ中ヒ退ヲ入ヲ寸地ヲ勿論ヲ内裏ヲ義
第ヲ歩死人知行往来ヲ潤玄新朔等假名方
可被ヲ処ヲ

元亨ニ後醍醐ニ位三年ヲ元亨元年ヨリ元亨元年ヨリ
ヨリ宝永六年ニ至リ三百八十九年

文明八年ニ後土御門ニ位十二年ヲ文明八年ヨリ宝永
六年ニ二百三十四年

此ヲ書ヲ年紀未考

就権祝職願可拝堂秋之由被
望願申ニ可被拝堂ニ処往来田下地可勘落ヲ
何様ヲ細ニ弁ニ申ヲ後可被跡膏
ニ仍テ仍テ仍テ

・小野氷室　延喜式云氷室山城國愛宕郡小野ノ一所

他社御戸代田之事

續日本後記云嘉和十五年三月壬申勅奉山城國乙訓郡山崎明神御戸代田二町

井閼

あいまの方へ下行もろ女のもとへ

新後拾遺　忘れ逕すいのもとの水よかけをくれよ

・賀茂社家系譜　神主景久　神主氏久云中將為通為藤等之母

梅辻

梅原

三代格云別雷社　四至北限梅原山

美度呂池之關

・親長記云文明三年三月十五日親長參賀茂社

祠官等申美曽呂池閼如元可被立之由可被仰

武家ニ事

中太路　自文治三年至寶永五年凡五百二十二年

・賀茂社家系譜　神主景久　神主氏久　二男　号梅辻（ムメガツジノ）神主

又近代松下神主元久二男馬場式ア与久二男景久元年久後改起久　始号梅辻（ムメツジ）今郤久祖父也

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

・文治三年十一月十四日後鳥羽院賀茂行幸記云今夜法皇（後白河院）（有落文）為御方違御上社過幸路可過其前給仍余自閑路（上）太田中大路之下車先以参入之（上）　全文見行幸部

字今田地ホノニ有之上古地ニ字皆アリ於田地称字事或云田名之俤ん

・神宮雑事記十ト二所之内ニ字ハ一ニシト見ヘタリ縦ハ三宮郎字ハ衣比原御厨十ト二古九条

山

歴代編年集成云元慶八年七月廿九日官府ニ賀茂神山四至内停止狩猟ノ事

後深草院御宇好嵯峨院宸翰文章云本紙ニ今傳来　于時神主能継貴布禰ノ宣世平同祝保継

貴布禰東山新道畢不幸事可停止之由被仰難馬

建長七年七月十八日

賀茂神主館

朝野群載巻第六云

治部卿判

貴布祢社
請被下 宣旨於主殿寮永停止一鳥居内伐木并
祭火伏
右神山之内被禁樵蕘在格條嚴制稠
疊而當社四至内山乎之殿寮領山錐為接境之
地已有限之壇爰近代以来寮吏濫減
神山神妄違例莫不周斯望請天裁被下
宣旨停止樵蕘之輩將仰神威之嚴仍勒妄
狀謹請處分
年月日
社司連署

件奏狀後以神祇官解狀許申也
已上朝野群載之所載也

賀茂河
拾芥抄ニ隊鴨河使 使次官 判官 主典

類聚國史 巻第五 神祇部 仁明天皇 承和十一年十一月壬子
鴨上下大神宮、称宜外従五位下賀茂縣主廣友等
(款カ)愚曰、所謂鴨川経二神社指南流出而王臣家及百
姓等、取鹿糞於北山、使洗水上、其末流来觸神社
因茲汚穢之崇屢出御卜、雖加禁制、曾无愼
者、勅宜仰當國、(三ヲ)近河源巌、(中上)加禁斷、若違犯者
禁真身、(下)申送國郡司、并祢宜祝等、許容之者
必處科
本文見観格文、可載之
承和十一年十一月四日、禁制汚穢鴨上下
大神宮邊河格云、彼神宮祢宜賀茂廣友等解偁
鴨川之流経二神宮、但欲清潔之、豈敢汚穢而
遊獵之徒就屠割事、鑒穢上流経觸神社、因
茲汚穢之崇屢出御卜、雖加禁制、曾不忌避
仍申送者、大納言正三位兼行右近衛大將民部
卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣奉
勅、神明攸察、使不愼、宜仰當國、得禁斷之
西宮記曰、防河使事、上卿奉勅任使、參聞下
式部、使申損色築覆、或公卿等巡検之
夫木集之歌ニカモ川ヲ防ク司モ心セヨ堤ノ穴ヨリ、サミダレ比
和事始云、賀茂川、別流

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

賀茂川をわたりて弓削氏を過ぎて長
十六年の角倉子以これをもつむ　羅山集
三代実録巻廿七仁和元年六月甲寅朔廿八日
辛巳賀茂井門親王臨鴨水修禊事
法成寺事
海人藻芥云法成寺者執柄御願寺無双寺也而
近代令顛倒無跡形剰寺院敷地皆成鴨川而不
知何処無念之
河海抄云（但上下略之）東川賀茂河西川桂河中川京極川也之
藻塩草云中川京極川二条上之御堂殿と法成
寺とのあひ

岷江入楚云古人称中川清滝川桂川
とより在行成卿記
●木船河
後圓融院御宇後光巌院御政務之御時被
下院宣文章云
貴布祢河堺事如宣使注進者馬指河
以東之條無相違之上鞍馬寺就安和嘉禎
宣府雖申不存或不載正文或非堺不見旁
無擬欲此上者至貴布祢東山者早可致致
答領者、新院御気色如此悉之以状

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

為賀茂末社之旧證

應安五年十月廿五日　右中將判

賀茂神主舘

「手時職事園少中將基光傳奏葉室中納言
長顕之ゝ」　清茂按葉室家無長弘長光欤長宗欤

右本紙紛失旧記之表紙
貴希称ゝ宣能隆　同祝豊久之ゝ

池

「氏福記云神蛇（チヤ）池ト云ハ神ぢや龍王勸請ル社を云
今をあやまりて神ちやゝと云
今乃風圖處乃數の内東乃端よ池あり梨

賀茂より西詰あり是い今も池と云ハ伽藍のうちれ神ぢや諸王鎮守の池やとゝ賀茂兎門の方よあくをて投うれを傳教開基ー玉ふ細ある處きる

「或人云季通縣主出雲神山有之蟻（アリガ）池此池本号葵（アフヒガ）池後人誤称蟻池ゝ清茂按葵池之号季通古記有而見ル而謂欤未詳矣

〈官幣

貞享四年丁卯年十一月六日大嘗會官幣使
花山院中納言 持重卿 御參社 內之次第
先勅使於外鳥居下御下乘
次於鳥居東南方御手水第一設手水具役之
御手巾拂杖捧之
次陰陽大夫祓
次行列
時及黃昏則松明役人左右前行社家兼沙
汰設之社司一列 假內 鳥居內東方 薄疏南上

西面神主正祢宜東第一社司衣冠氏人一列
俱内鳥居外同簿跡北上東面或鳥居内社司
次一列
次於内鳥居下御祓給
次昇舞殿南階御着座
先是於舞殿前庭儲案一脚置幣物於案
上両儀舞殿簷下立案
次神主俱舞殿之北砌第一設載両儀土屋
次勅使再拝讀給宣命又再拝賜宣命
神主昇舞殿北階自東方進膝行候勅使
右方受之右廻退下持参宣命置神前小庭
之案上
次正祢宣進舞殿前庭取幣物持参同置小庭
案上或宣命已前進宝前両例拍手二度
次神主再拝祝詞申自神前退出返祝詞申
拍手二度片岡社前玉橋南大岩之巽角
次勅使拍手二度(ヌカリ申)應(ヌカリ申)拍手
次勅使起座下舞殿南階御退出

已下清令覚書

一惣奉行 案内者 修理大夫 雄平 衣冠 刑ア大輔 佐直 衣冠
河内守 清番 左兵衛権佐 演父 隼人正 清令
玄蕃助 氏行 各浄衣一鳥帽子お迎舞殿ん
案内ヤ

一幣物清士持第 所司別当土ノ方ニ清ム
並殿文ホ結ヒ薦包ノ解士ノ屋ノ案ニ置ホ
士ん一後方ニる楼殿ノ案ん不ヲ実別当
ホ実ホ人ニ内持参ニ堀但刀祢ホ人分更ニ

一社ヒ掃除ノ事 掃除講中ん頼入事 沢田
ノ様ノホノ跡石垣ホ入事

一四日ニ神主 維文 ホ人ニ両人ニの七事

一神人十三人 刀祢六人

一簡火三ヶ所但楼屋右並ニ鳥居ノ外東
ノ方ニの儲之

一玉橋之通ニ松明持ク神人ホ人梅宝之内
二人祢ヲ神前ニ案ん 宣命持第ノ時ニ
同二人ホ祢宜幣物
勅使ホ向之次第

一案 氈 脚高三尺六寸 長三尺
巽ヒヲ通四方同前神前ニ案ニ日陰草ヲ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

飾ル四足之

一案ノ重而神前ノ小屋ヨリ橋屋ヲ為山根ヨリ古案ヲ土屋ノ西ノ方ニヨリ至

一手水桶（但曲鉢也一鳥居ヲ指ノ東南ニ置ヲ指構之

一勅使乗向之節諸大夫ノ外ハ濃紙四ツ折ニメ引枝ヲ尺弐寸ノ串ニ挟ミ弥勤仗諸大夫ニ渡ス

一座舞殿ノ南方ニ東西行ニ榻之但畳ノ表ノ裁ハ差忌子屋ノ畳ヲ用也

一結燈壇二ツ左右之分ヲ以

一神主ノ座

一正祢宜ノ座土屋ノ西方ニ小面

一行列奉行内発（氏侍）助（保加）兵衛神前之案ト持筆ノ時之用

一中大路町ノ地下ニ橋ヲ分ル事但橋ヲハ代方ヲ以ス

一川町門ノ外ヲ通町西ノ門前掃除事

一関目ノ橋ヲ十禾寺町ヲ掃除ノ事

一勅使ノ乗向ヲ休息所神主里亭

一大挑灯二ツ 壹ツ 神主門外ノ左右ニ置ク
同断 重門ニ壹ツ 壹ツ 廊ニ置ク
一勅使ノ供廻新土ヲ盛ル
但供二人 松明持共ニ
一神主二前ヲ神人拾人二行ニ立松明ヲ勤仗
一手水ハ後ノ鳥居ノ内西ノ方ニ仮湯ノ設ケ
以上
ヲ事

扶桑畧記曰天喜三年五月八日乙丑発遣奉幣
使賀茂貴布祢両社ニ旦之則貴布祢本宮為水ノ
流擲仍被移立他所之由也
百錬抄云天喜三年四月廿六日貴布祢社為水
流擲移立他所

・貴布祢官幣
園太暦云貞和三年六月十三日旧記勅例云
正和四年五月廿一日被発遣止両二社 卅生
幣使此間禁裏仙洞産穢御混合七ケ日以 貴布祢奉
後也貴布祢為賀茂末社可為此ケ日之由雖

考賀茂末社之旧証

申之就公家之法被立之イ

薩戒記云永享五年請雨御祈禱之時
伊勢 名作 参主 石清水 名作社参
三位 法下代
同上 賀茂 名作 神主 貴布祢社 賀茂摂社也祈
鴨同之
北畠准后廿二社記云貴布祢加當社号廿二社也
同上 両時奉幣毋生同當社仍
於此廿二社上中下品被定之事中古以来
事也

寛元四年四月廿九日後嵯峨院御幸記云御座幣
案木守東向儲之幣案二脚妙幣九本倚之
下社二捧松尾河合各一捧 在南上社一捧若宮貴
布祢 片岡 太田各一捧 在北 経俊定朝ホ記
同

私幣

台記別記久安四年九月廿八日癸巳使仲行申禅
閤曰著唐衣之時着小褂乎敢来曰禅閤不悟
仍問女院之 作曰故四条大后曰着唐衣之時
不着小褂着小袿之時不着唐衣是礼也詣

神社及奉幣之時者庶子不名小祢

百日奉籠

同記 久安二年八月十九日 女御代 七歳 自今日奉
籠賀茂 百日 九月九日 一品比女御代外舅刑部
大輔忠宗卒 去 女御代 自 賀茂可 出家 否 問法
家 明法博士有隣申云可有二日心喪 早可
出給 左衛門志兼成申云七歳以前無心不可
有心喪 依 例者 即動申 證文 若 例者即動申
延喜七年太子七歳以前無心喪之例奉件
度 勘文 之不令 奉

行幸

齋東俗談曰字彙非所 揃 得而得 真 不 免 而免曰
幸 小爾雅非分而得謂之 幸 天子ノ出駕ヲ行幸
ト云コトハ車駕ノ至ルトコロ臣下ニハ食邑佩帯ノ屬ヲタ
ニヒ民爵級アリテ或ハ田租ノ半ヲタテヒ諸人幸ヲ被ムヘ
キ因テ謂之幸 蔡邕獨斷ニミヘタリ 院ノ御出ヲハ御
幸ト云然トモヲリイノ居天下ノ政道ヲ綺 タニヲヘキ謂
ナケレハ臣民幸ヲ被ルヘキ理ナキユヘニ昔ハ御行ノ字ヲ用
續故事談云四条大納言隆季或人ニ向曰行幸ノ幸ノ字
ニヲ用ルハ何ノユヘリ哉人答ルコトアタハス側ニテ梅小路ノ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

中納言長方ソレハ本文アリ天子行處必有幸トイヘリ故ニ
幸ノ字ヲ用ヒリ御幸ニハ只行ノ字ヲ用テ御行トカキ来
ルナリ世ノ末サマニハ上皇ノ御行ヲ幸ノ字
ヲ用ルモ義タカハサルコトナリ

大神宮諸雜事記云天武天皇（四十代）即位二年癸酉九月十七日天
皇參詣於伊勢皇太神宮或本云從飯高郡遥拜皇太神
歸御之由矣也件記文両端也記日本記云ニ
元亨釈書巻第二十一持統（四十一代）天皇
神宮預令百僚嚴行裝ヲ

諸社行幸始

諸社行幸始賀茂 說見于左

石清水 六十四代 圓融院 天元二年三月廿七日丙午
平野 同 同四年二月廿日戊子
春日 卒六代 一條院 永祚元年三月廿二日癸卯
大原 同 正暦四年十二月廿七日庚辰
松尾 同 寛弘元年十月十四日甲午
北野 同 同年同月廿一日辛丑
日吉 七十代 後三條院 延久三年十一月廿九日庚辰
稲荷 同 同四年三月廿六日丙午

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

祇園　同

諸社行幸終後醍醐建武元九廿七賀茂　此後断絶歟

「世ニ extra 覧云延久三年辛亥三月朔六日始行幸稲荷祇園行幸云々

園社同四年壬子三月十六日稲荷祇園行幸

右同日

●賀茂行幸御代々畧次第

五十代
桓武　一ケ度

六十一代
朱雀　一ケ度或説二　六十四代 圓融　一

六十八代
後一条　二　六十九代 後朱雀　一

七十二代
白河　十　七十三代 堀河　三

六十六代
一条　二　六十七代 三条　一

七十代
後冷泉　三　七十一代 後三条　一

七十四代
鳥羽　六　七十五代 崇徳　五

七十六代
近衛　三　七十七代 後白河　六

八十二代
後鳥羽　二　八十三代 土御門　一

八十六代
四条　一　八十七代 後嵯峨　一

九十代
後宇多　一　九十一代 伏見　一

七十八代
二條　五　八十代 高倉　五

八十四代
順徳　二　八十五代 後堀河　一

八十八代
後深草　一　八十九代 亀山　一

九十五代
後醍醐　二

右自朱雀至後醍醐凡廿七帝而六十九ケ度

但加桓武又従朱雀二ケ度説廿八帝七十一ケ度也

自朱雀天慶五年至後醍醐建武元年通計三百

九十三年　自後醍醐建武元年至宝永七年凡三

百七十七年

自桓武至朱雀之間平城　嵯峨　淳和　仁明　文徳

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

清和 陽成 光孝 宇多 醍醐 已上十代 年数百二十
無行幸之儀 其後自朱雀至後冷泉之間 無當社
行幸之帝王 凡八帝記干左
朱雀之後 村上 冷泉 圓融之後 花山 自一条至三条十三代
三條之後 六条 高倉之後 安徳 自後鳥羽至伏見院十代
伏見之後 後伏見 後二条 花園 此後後醍醐 行幸二ヶ度

一 事根元六月十日神今食乃而ゝ行幸此日のけ
奥ハ葱花なり
・御即位和字記云葱花とハきの花乃ことを含て歩

それ奥のつゝしまずらん是ハ此神の乃時の行幸
みやこうつり奥なりけん

水鏡巻下曰桓武天皇延暦十二年ゟ今乃京の宮
城をたてそめ同十三年十二月廿二日辛酉長岡
の京ゟ今乃京へうつりたまひて於乃れ乃れに
行幸ありき

拾芥抄諸社部云行幸始賀茂朱雀院天慶五年
四月廿九日或云嵯峨天皇弘仁五年
賀茂社記云嵯峨朱雀院とゝもけの寛
平法皇乃仏孫延喜帝乃皇子也此御代ゟ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

至りて世中はえうしき事ありて放ち平将門
といつるもの勅宣をうけきて東へうつく謀逆
をくわだて東八ケ国をうちとりて平親王
とちしてー門兄弟眷属をへ卿相雲客諸
司乃いうはうの物ー名ひとりをのこさ
に都をうつく正税官物をうばひとりをのこな
く没収せすこともといつるもの将門は内裏
して西國にうつく謀逆をおこしはうー九ケ国を
うちおさめたちまちに東夷西戎一時にたちまて
四海をうこかし侍ー天下乃さわき人民乃
をきいのちをうしなうへきことを無い歎慮をなや
なけれ公卿会議ありてつく兎角ありて
乃めうせうよのためうつくたいらかに
とう静謐なうへきとて兼平五
年四月十五日改元ありよ貞観政流社は行幸なとて
あうく信心をこらすうつくしく御祈
りう誦社乃行幸と申事いにしへよりめ
ちうへー十善一万乗の
まうけ又いうきの乃ちうつくしく御幸ありて
れ事御よ希代乃ちんなる珍い神慮も

天慶二年五月廿五日 西度之說
日本記略云天慶二年四月廿五日天皇幸賀茂社同五年四月廿八日壬午天皇幸賀茂社奉神宝幣帛之馬(カノ申ニ)云々神位をそうらひやうしなされ候
兵乱平和之賽也
賀茂社家系圖云天慶五年四月廿九日為正說 私云廿八日朱雀御門行幸賀茂社之時称宣等加給爵位依此功也
賀茂社記云行幸朱雀院天慶五年四月廿九日壬午
初所行也
中右記云行幸朱雀御門(カドガ)勅使(ニ)勧賞叙従五位下(ニ)平将門(ニ)報賽也

つゝしみうやまひたてまつるあらきなるれいをもちひてもをろかなるこゝろをもちひたてまつるときはのめぐみにあつからんことをねがひたてまつるにしきのみてぐらをさゝげてかしこくもしるしをあらはしたまひぬ還幸のみちすがら将門が四郎首をなげすてゝ降参しまいらせぬ小野好古よりはじめて東国を西海もことごとくしたがひまいらせぬ是ひとへに神のたすけたまふにあらずや時に帝乃忘憂をよろこびたまひて志のふかきをうごかれめぐみふかくまします海内のよろこびなにごとかこれにしかんやいはんや海内こゝろをやすくして兵革をとゞめ万民をして安堵の業をなさしめたまふ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

註進雜記云一條院永延元年十月十日ヨ官幣
ヲ石清水賀茂ヘ同年十一月八日ヨ石
清水ヨリ行幸ナリテ同十二月十五日賀茂
行幸ヨリ帝恒例ニ
後一條院行幸
野府記云寛仁元年十二月一日大閤云行幸日河
合作岡貴布祢三座明神可奉増神位ニ
三日大外記文義申云河合作山貴布祢被奉
千時祢宜忠頼

増正二位ニ
作岡作山同事欤其議見作岡社神位條下
但作山ハ作岳ノ誤欤
時祢宜同上
同上
長元二年十二月十日甲辰行幸
千時祢宜安頼 万寿四年丁卯補
祢宜 長暦元年丁酉譲祢宜職於親経親経不孝
之間同二年始還補神主而後以嫡成真為代官
永義二年卒千時譲与神主職於成真任十一ヶ
年ニヽ神主之任安頼為始
後一条院行幸二度 寛仁元年十一月十五日
長元二年十二月十日

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

後冷泉院行幸

天喜四年十二月九日神主成助叙外従五位下行幸賞

見系図　又見作者部類

注進雑記云白河院第保二年四月十三日法代始行幸あり法数那よりつゝく今年は毎年行幸なり面々よ宣命に中葉の頃（私云十ケ度）より九ケ度なりし是よりつゝ当代乃行幸也月日同故に雑記清茂按第保二年三年相続而行幸也

以為一ケ度仍為九ケ度歟

園太暦貞和四年九月十八日御裏日行幸例書

中云第保三年四月十三日戊申（白河院　于時神主成助）行幸賀茂社

堀河院行幸　（九歳ヨリ四）

毎年始之

中右記嘉保二年四月十五日庚辰朝間陰雨不下今日賀茂行幸也下略上社司九人勧賞

神主賀茂縣主成継

祢宜――安成

祝――成季

権祢宜――重助

権祝――成長

片岡祢宜――成定

同祝――成頼

奏布祢宣、――成忠
同祝、――成氏
崇徳院行幸
洞院家記曰六日保延六年庚申閏五月一日甲辰行
幸當社　権大納言菅宗輔　行事辨源俊政　社司
六人各去月廿七日以八幡例可賜一階之由令申之処
権祢宜代有季一人給一階御幸之御幣ヲ申乞例ニ
依テ同行幸御幣ヲ申賞也　祢宜代官権祝伊
賀ストイヘトモ（本ノマヽ）祝代者即并祝言申幸（有カ）叓之ドテ依
院宣権祢宜代ナリトモ祢宜代ノ者ナリトテ有季御
幣ヲ申
以上記文中右記之文也
于時神主成宣

近衛院行幸（原本在伏見宮）
本朝世記曰久安元年十二月廿四日甲辰天晴是日賀
茂行幸也代始上卿権大納言雅定卿以下参入宮
外記有召仰事次被奏宣命午剋御（今日依行日）
下社司祢宜季継雖申三位敢無恩許参依令
許申、自余勧賞遅可被宣下之由被仰下ヲ
上社司祢宜以下七人叙一階（神主依重服不預賞）寅剋還宮
上卿着伏庭被仰下行幸官勧賞従五位上小槻
師純史従五位下清原重憲外記源季頼仗上卿
参議辨遅可随申請者重謎也系圖云久安元年十一月三日補神主
清茂按神主者重謎也

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

舎兄成重服暇之中也云々又成重譜云文安元年十月卒云々以
是知十二月四日者暇中日之中也

薩戒記 應永卅三年七月廿三日記云引見治兼三
年八月廿三日御記之処有行幸 高倉院 時神之重保 巡検花山大相
国依云深沓被用半靴之由云々
或記云 清茂按此記後法性寺又号月輪禅閤実之玉葉記也諸家
知譜拙記云九条殿勘実文治二摂政日五大臣建久二内白云々 後鳥羽院行幸
文治三年十月十四日陰不雨此日賀茂行幸也當今 中略 初度
法皇 後白河院也 更以無益次余於鳥居外乗車 候後陣今夜法皇為
御方違御上社 有脱字欤 還幸路可過其前給仍余自南路 太田 中大略
泰會於南一鳥居外下車先以泰入経御所北幔門昇自
同北辺廿時御輿入御自西幔門昇居北第三間御輿
寄 中略 主上 即欤 御平敷御件御座 座欤 在庭幄前 乍此御所
平敷御座第一間供御拝座五重 東欤 裝之也 次余仰定経令昇
置神宝等 先即所也 庭敷薦 東西行南次立案 倚欤
御幣取置神宝了進軾於下社也 下社加川合社多仍二社
北相並也
次主上御手水 女房陪膳如初了 着欤 御
御贖物次供御麻 陪膳後 送同前 次宮主
卿経西庭着座 在左主座巽方 上卿向北
三足木 今度無論余儀 行舎子細之故也 次上卿

置御幣不復座直出自北幔門參上社頭於下御社給指頭花
仍於上社不給也故不復座余亦定經仰社司賞事次撤
其理可然
御笏又撤神宝如例次余退下休幕北鳥居外東
脱也余歩行也即解脱休息於此休幕不覆膳也及丑終又遣隨身
令召之帰来申云御神樂韓神之間也之仍余著
束帯伴良経泰定在所此間上卿以定経申云賞
布衲々宣有忠服暇也以代官申賞祝如何余云服暇
之人不蒙賞歟代官条先例如何又云被申云何例之
処天仁度或被賞代官或被仰追可申請之由之余被
追可申請之由可被仰也猶服暇之人以代官被賞無

有忠贵布衲宣
笃忠之一男也为
神主宣忠之养
子

天仁二年八月
鸟羽院行幸

其謂歟 中略 次上御馬於南次馳北 社方
御西幔門了其後於鳥居外乘車 馳也 中略 次御輿出
了仍無下略
狼藉也

社司賞

神主重保 追可申請

自余上下社司任社家注進交名皆一階也

[長茂卿記云 此記一名如天記又三黄池]

建久七年十一月五日庚辰晴 天皇行幸于賀茂社
之日也中略次公卿内大臣殿次笏着座北上東面次舞
人上御馬也上南 左大將知光駕騰黒次馳御馬馳北
也

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

侍従資家馬假弓以小舍人問安否歸来曰於身者
無恙御馬不踏立尤前呂弓泰進仰曰如此之
永久二年十一月 鳥羽院行幸 時先例如何可被用何馬哉弓申云永久二年神馬
忘却俄被引進殿下移馬於神馬者可令腐(イゴモリ)籠
事也雖被用他馬猶以如此於舞人馬者被進移馬
可宜候欤仰曰尤可然凡胤毛駁(ブチ)馬可引進之由可令下
知予欲仰其由之処資家示送曰御馬足可踏立也
申斜亭上社 騎用可泰上社即申其由神妙由有仰此間三方幔
如元令引之次寄御輿幸上社 御輿経本路 于時申斜也 自川原幸也
鳥輿如飛着御上社雅楽寮奏楽神祇官
人又獻大麻 於南鳥居下獻之也 乗輿入頓宮西幔門寄御輿於
西階 社司儲御車宮司供菰道 花山院宰相中将又上御簾取
璽劔令授内侍 内侍兼泰儲也下社 内侍自下社退出也 主水司供御手水
宸儀着御〻褰座 小面立頭右兵衛督又献御笏
掃部寮敷薦内蔵寮立案机置幣神祇官人
置神宝 幔門以西置之已上次供御贖物入東北角幔門仮之 次
宮主獻大麻 自東方供之 入自東方獻之 内侍高能朝臣取之供之即返
給宮主着座 自東方経着庭如初 次引立神馬
十列馬 以神馬立西十列馬次第 自西方可牽欤
御禊了宮主退撤御祓物上卿取幣立御拝了

[天仁二年八月 鳥羽行幸]
[長治元二廿七 堀河行幸]
[永久二年 同五年 鳥羽沈香]

置酒直盧北幔門此間予申妥由仰社司賞事（注東幔外）至小幔門下仰之若可經西幔外歟隨便也次上卿率舞人參向神主資保以下十三人各叙一階社内次第一同下社頭遣使向社頭事此間采女供御膳殿下有沿仰曰於頓宮供御膳一宿時事歟予云天仁於下社供之長治永久於上社供之於頓宮供朝膳於本宮供夕膳是恒例也仰曰有例者早可供即供之次以女房申殿下云衛童可令供酒可待之由有仰頂之早可供之由有仰御所西面二箇間（自北第二間也）儲殿下御体所（今度上社御休幕屋破壊仍無其所）中署次舞人公定為申事由（件御休泊也）上御馬（上南次馳之）馳北有沿仰曰舞人九人馳御馬如何可習子細侍從公雅称所労由仍上卿可令陪從馳御馬之由於社頭被加下知而陪從又皆悉逐電予實不知此事公定不示此子細依藏人實範駕後公雅馬再馳之可謂違乱也

●勘合記文

園大暦日録云 寛和五年（崇光院年号）三月廿八日新日吉社遷宮依無両社御幸無御幸事（考二光明院行歟）

清茂按 後圓融院寛和二年三月廿八日両社行幸あり（光明院の誤りていまず）無両社行幸之故新日吉遷宮

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

東山院

宝永五年三月八日依 朝 内裏炎上 天皇行幸賀茂社
申下刻 以細殿為御所 四方金簾 又引幔 内侍所安置常殿
東宮 女院 中宮同行啓以忌子屋為中宮 幸子
之御在所以神宮寺為東宮御座以靈屋為戌刻
女院御在所諸卿殿上人等群従 其群居 路次所司警固
許四御所共還幸直入御于近衛殿
仙洞 識 御亦者自始入御于大佛妙法院宮之
時神主就之
右四御所御輿皆以其御在所近舁入之了

但後日自女院御所白銀五枚賜于一社 自禁裏者
五月廿日自大典侍局被招惣代昌時朱上之處白
銀拾枚下給之為御内々之儀之間可為穏便之
旨被仰下了 自東宮御方者同月廿日白銀
五枚下賜之

△御幸

後三条院

・諸社御幸之始

世々摠覧云〻延久五年　叡丑二月廿日大上天皇幷
女院陽明門院一品宮御参詣八幡宮於山崎遙
移御船参向住吉社亦五日御参天王寺拝仏舎
利

清慎按翌頃以住吉為諸社御幸始今摠摠覧
則八幡住吉両社豈始也

平家物語巻第四厳嶋御幸之条云帝王位を
ふみ給ひしかども未だ安芸の厳嶋へ詣でさせ
給はず白河院鳥羽院度々詣でさせ給ひけれ
ども未だ御幸なりしかば今度の御幸とぞ聞え
ける

水賀茂春日御幸なりすは我山の山王へ
御幸いなり奉るべき安芸厳嶋へ詣でさせ
給ひしの例なり神興を奉
ふよりそ御幸とは申すべき
入る相図なるべし

・御神事法

寛元四年後嵯峨院賀茂御幸定嗣卿池亦
三ヶ日御神事共儀同八幡但僧尼社頭禁神
馬齋籠亦同

中右記云天永二年四月廿八日今夕法皇令參詣
賀茂社御也 中略 出御東門經大炊御門南極
条大路未於下御社外鳥居下此間及東燭下御
後御車 敷筵道令著 公卿 法服御也 人數三輩迎候以舞殿北一間懸御簾為御所
入御之後院司取御幣 暫立御前神馬神宝
付社司早社司返祝可早出御上社作法如此但
於内鳥居下留御車下御也 依不入社中 良久還御
其路經齋院前并大宮中御門大路未還御矣

鳥羽院

洞院家記者六日保延六年庚申五月十六日己丑御幸
賀茂祢宜季継権祢宜惟文氏人季氏矢亡之間未奉
社頭祢宜代権祝伊賀権祢宜代氏人有季依 院宣
仍置祢宜代官権祢宜代官有季申御幣

同上

右洞院家記中右記之以記下之、時神主成重
父安三年十月廿五日乙卯 御出家之後始詣
于時神主童継父安元年乙丑十月三日
補神主同四年十二月廿四日被止 氏人起数百人之事 未
依向大雲寺也
被仰出之間以正祢宜保父為神主代同五年正月九日
被放代 同六年七月廿九日如旧還補神主 仁平二年

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

十二月 據古記 卒去

建久九年御幸社家記云治承三年御奈良之時
後白河院
時神主重保
初相儲外御所候也
後号永光
注進雑記云社記云建久九年二月廿六日於賀茂社
御幸行事如先例
御所
御桟敷
御幸
御所
御桟敷
御幸
御所
御桟敷
御幸

今なきの事ありてをや建久よの異俊の
例幸也とそ
後鳥羽院御記 本ハ家記ニ
出御門渡給
太田祝有久記云建暦二年三月廿六日院御冬
籠亦八日有五番之競馬馬八大将殿被牽出統同
日能久奉召御鞭　時神主幸平
百練抄云建暦二年三月亦六日上皇自今日
七ヶ日御祈賀茂社三ヶ日上社四ヶ日
亦八日上皇於二条上下社有競馬事各五番
太田祝有久記云或記事賀茂久朝家日記ニ見トアリ 建暦三年七月十七日御幸有
十番競馬条尤陸奥守仮名卿　社ヲ同ジ

後鳥羽院御記建保二年四月廿一日自今日賀茂下
上七ヶ日御祭就有七番競馬ヶ日社司氏人未競ヲ
雖社司若輩第之各著狩衣
一番　大田祢宜久時勝　二番　大田祝清平勝
若宮祝　氏人望長　氏人有重
三番　氏人季久権祢宜能久
氏人注忠持
四番　氏人春平幸平末子　五番　氏人弥平　貴布祢宣権平嫡子氏人
氏人能継勝　能久子　氏人久友勝　貴布祢祝資平子
六番　忠友勝　竹園祝忠長子
氏人弘安　久友兄
七番　氏人清助勝　氏人房
御祭就中有蹴鞠在小弓会祭禁
四十余人云々

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

後堀河院

経俊御記云寛元四年四月廿九日戊子天晴日出以
前參院今日賀茂御幸也中略祝進出申返祝
清茂按定嗣之記云令懸御冠桂令挿中子後御冠若退下之時挿御冠云々与此記異歟
挿杖拝祝畢院司大納言進寄取之昇小階
葵桂ホ
東邊進之上臼主取之懐中大納言取笏杖右
次首頭中將於小面簀子仰勧賞事
叙一階祐盲
祐継賞譲頭中將就内府座上砌下仰之
南為上蛆非院司依上首内府着西
奉行之是又先例也
之親頼泰仲下美之
建久経座中泰進次親頼於舞殿西砌邊召祐宣
仰之次還御如御泰議
公卿列西邊
南面

葉禅記 又名葉黄記
定嗣卿記云
御車頻引入
輿於鳥居内
供御櫛御笥
等且儀皆
賀先行列亦
如先
若入夜着待
臣御随身
取松明社家
路頭立柱松
河邊炬篝
火細殿入御
之間左右掌
燈之
同記亦云
三方引幔細殿
南庭有幔門
東土殿同為幔
門土殿公卿
座也懸御簾
之

次幸上社其路如行幸時鴨
川浮橋使廳渡之於外鳥居下々御公卿列
鳥居内南上北上
西面侍臣列鳥居外
如初入内鳥居入御細殿御所南面
御簾殿上人當假西南邊御劔役人參簾中先是
舞殿北第二間脩御座別納所渡之件御座向宝前着向
社家橋殿角可供之然而前々無其後之
舞殿北庭立幣案倚白妙幣金銀御幣於
燈之
同東邊夾儲之次供御手水樔手洗渡之次自東面
出御内大臣褰御簾又候御裾三位中將献御沓昇
御橋殿南階着御拝座御劔役人假南階邊
次頭中將昇南階献御笏院司行家朝臣渡東橋

取白妙幣立次院司惟忠朝臣取金銀幣儲東砌
土即門大納言不解劔亘東橋跪拂笏取金銀幣昇
北階東過進之拔笏經本路復階東過次御拜
兩段大納言如初進昇拂笏取御幣退下於北庭

定嗣卿記云神主還桙拂院司公卿取之進御座其後皆如下社式入御之時於細殿獻之有例

私云定嗣卿記西北庭

名神主久継賜之跪拔笏猶復初次院司置白
妙幣退出神主參社々司亦取白妙幣各一本參社
神主還出申返祝不持桙拂次神主持參桙拂杖下社雖參
以後猶進參上社称大納言取之進御座其儀如下社
先例又進桙
上皇取桙即懷中又如初建久令拂御冠神主不持杖
早出仍大納言倚杖於北垣下次主典代賜祝師禄

日記前文
下社
廻神馬註
先例入御
勅使殿以
前廻之今
度依別仰
如此云々

大褂次入御細殿即所 嗛面次廻神馬 左府生久則
引之御禊之時右府生兼躬引之廻橋殿經東西橋三廻之後於樓門内社司請取之
此間内大臣着東屋頭中将進東面簾下美勧賞
事 賀茂康家叙従五位下内府召親頼仰之如初辞
神主久継賞譲
仰社司還御如初經河原西路入御御所中略
今度社頭鋪設任建久例社家一向致沙汰訖下上
社共引幔建久上社許引之下略

右經俊卿記 清茂傳来

後山科言経

同經俊卿記云建長八年五月一日辛卯天晴今日不出仕

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

院密〻御見物賀茂御馬走〻即此幸今出川
殿 五日乙未天晴今日賀茂競馬院密〻有御見
物見物車成群亭於鴨社邊伺見〻競馳車
木生童小下誠一日之荘観〻お競馬不伺見
〻而見約尺〻御参近日牛車繁昌之比歟者
競馬三番御見物心後還御〻大夜被石塁直
衣侍如何 同月十四日甲辰天晴自今日院御差
籠賀茂社〻給葉奉祈〻十六日丙午天晴
早旦未明社御所〻別當 安陪義事
時 神主能継

後深草院

賴親卿記 此古記清茂傳来

文應元年八月十六日 辛亥 晴也今日被始賀茂御精進
其儀如 八幡之時
十八日癸丑 晴天快晴白日高明今日賀茂御幸也 可為去
夜八幡御幸之時儀被遍用 中略 挿榊お杖
之条勿論歟也
十三日之
進之 御拂頭院日大納言 先駈〻 挿
冠〻 御前〻 大納言
参〻上皇〻〻御儀中 先駈〻 挿
空杖右廻下小二間返給杖 御前〻
師綱大御台一領 山乃撥御
自小西〻方入御 自陰剋儀
自東西入御 不 初次通 持加
役人不 初

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

仰勧賞事　従五位下鴨祐宣叙一階
祐宣祐俊賞譲
勅使　端座　次右中辨光國朝臣
御廊ニ還ル　右祐俊仰之次還御如常
次幸上社　其路如行幸之時　鴨川　於一条石下御
左御列　祐宣　南上　侍従列内外　如上
西面　東面
問仰云　前行如下社之儀　経内乍集入御細殿
南面　右大臣　候御所　簾　列立陽御階殿
上人　当候西南　還仮人進入御劔　御簾
橋殿北第二間　南御拝座　列納不動　宝前荘厳具
左御列　祐宣　南上　侍従列内外　如上
乾角　おれ　西面　侍従
是先例之　橋殿小庭立案　倚白妙御幣二本金
銀御幣　校門東　還昇立幸櫃夾徹　次供御
手水次　南御門　自東西仮人如昇　御橋殿南階着御
拝座　通坊朝臣　昌之　進入御劔
院司高経朝臣　廻　自東方　元白妙幣　立光國
朝臣　元金銀御幣　儲東御還　大納言　元昇
小階東邊　還　経西階　御着　大納
言　元給供幣　退下　於小庭　元給供幣　退下
宝前　院司　於仮　初　次　高経朝下　置白妙幣
退去　社司　次第　参　元一本榊　社頭　榊
申　還祝　榊　撫杖　大納言　元献之　進出　元献之

其儀一如御下社次廻神馬御遣勿論雄久宮引之
後お楯〔御〕下社引続き此宮之典代勝祝師禄大祓次入御
細殿仮人木如初次左大臣召光國朝臣仰之
勧賞事〔追〕而申沙汰大納言光國朝臣仰之
光國お楯殿乾角廻右能紙仰之〔こ〕楯四位之爵
殿乾角廻右能紙仰之〔こ〕楯四位之爵
頻蘇三品之賞
之中被仰下者
下下社前経堤汐西流先例之
汐〔一〕枚之中異 楯右代日吉御幸供奉并永久二
年日行幸 大治元年日吉御幸未有之例
一院覧元四年初度八幡御幸 依是也而
又建永二年二月八日賀社御幸日吉御幸未遂畢是仍々
日吉御幸未有之例

後陵哦代
後深草院

亀山院

後深草院
宸記ニ出

于時神主能継
大田祝有久記曰文永五年五月七日御幸有七
番競馬事元弘之代撃
世々絶覧云後宇多院御宇弘安四年辛巳自
九月八日新院御参籠賀茂上下百度 時神主
康家
弘安七年五月十二日新院御参籠賀茂御百度 秘密
弘安九年丙戌九月八日新院御参籠賀茂社御百
日之間上下御百度十月十三日新院自賀茂社御百

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

度還御之次御幸貴舟社 時神主氏久
以上
弘安九年御幸之事一疋家記云弘安九年十
月十一日神主氏久叙三尓同十二日先拝賀之後日十三日還御之
尓折節御幸御笠為吹飛風被下内裏御装束乃
間為彼御祝言自御所被下
先当社許参之同十一月九日上下社拝賀ヲ
仗見院
冬辛公記云 于時左大将廿五歳
永仁七年二月廿四日 上皇幸賀茂社仍早旦著
束帯 註略 参常葉井殿中略庭上案御幣ヲ
下社二棒 松尾河合ホ各一棒上社一棒若宮貫布
称庁岡大田ホ各一棒ホ也舁立金銀幣辛櫃
二合神馬二疋引立東中門外北方并陰陽師座如
例 春宮権大夫参下日時勘文云〻次有宣命下略
永仁七年二月雅俊朝臣記云廿四日雨子天晴風
静今日大上天皇幸賀茂社 去七日相當春日祭庭
廿日之由有沙汰之処又被今日所被遁也 雅俊申沙汰ヲ仍辰一點著
束帯参常寧殿并殿南庭當門間敷薦其上
立案一脚東向倚立白木幣九本下社二棒松
尾一棒河合一棒 都合四本在南上社一棒大幣也
各大幣也

若宮其南貴布祢作器大田未六一棒也
都合五本以南為上舁立金銀御幣章穂二合
神馬二疋下社栗毛大歟内府引進之上社鴾毛摸
政被引進之各毛牡
舘舎人四人引之 以厩舎人之稿以下木綿鉢巻白地黄布祢作器
後宇多院也
法皇御方相靜遠衛朝臣申次御幸上社
河原西行太田大路北行経奈良門前直橋於
外鳥居下乗御方大将上下両密被用輿公卿列立
鳥居内東方南上 殿上人列立鳥居外西方北上
西面 東面
御車頗引入轅於鳥居内供御榻御沓未其後
如下社但人又同前殿上人沓入鳥居前行列
又同前自外鳥居内至細殿御所沓左右頭小松
社家沙汰也経内鳥居入御細殿南面御所南面
庭以下并惣木一向社家沙汰也供御儲之欲殿
上人当候西南邊御簾御裾御殿同前舞殿
北方二間供御拝御座同前大文高葉半帖也同小庭
立幣案倚白妙幣五棒 別納所役
捧妙幣 上社一棒 太幣 若宮
貴布祢作器 大田各(濟)一棒
行事右少弁頼房下社御奉幣以前
宗向検知之先供御沐浴 森
時神主経久
法進雑記云後二条院乾元二年七月廿九日

法皇河上御幸上卿坊城中納言也但此度
ハ社の掌乃神司を引きそゝのかすのみ
清茂按ずるに乾元年中院数度御幸ありし
ハ後深草 亀山 後宇多 伏見 後伏見也
然るに乾元二年ハ幸と斗りていかなる
御ことも無きとうけ給はり候の記をもらさず考へし
同記云嘉元二年四月ハ又御幸ありぬ
見物ありなんなどうけ給はり候ひき
旦之亦断上におなじきや

但ハ乾元二嘉元二共時之神主ハ経久也

●条日御幸

中右記云寛治六年四月廿一日癸酉賀茂祭ハ二日
甲戌巳刻許上皇為御見物有御幸紫野 先
神館過留御車數剋御見物云々殿下御ハ神館
斎王御所

●後水尾院　明正院　東福門院

慶安二年九月十一日　御幸

賀茂系圖曰慶安二年九月十一日此日本院　政仁
新院　興子　女院（德子　仁和）御幸于當社所司代
校倉周防守供奉警固此日臨時之競馬有七
番三院之御座所屋也階下左方鉦有
久右方鼓福久役之神主理久着座各束帶
笏尻將袁束已下如式日自餘社司氏人伺候于
馬場列座各狩衣直垂或
外刀袙白衣神人黄衣百余人列居于埒下于

時雜掌忱直保矩也

競馬記云慶安二年九月十一日丁卯天晴今日
本院新院女院密々御幸仍為御覧有臨時
競馬（筆者儀埒并七番也自今日翌旦社司氏人俻
階下之幄）
細於一鳥居之邊而奉待御迎御幸及辰上刻陰幸
也御輿已御之時社司氏人各平伏了真路先自一
鳥居經玉橋楼門着御神前（今度伝乃密儀
神宝并小幣物ホ
無之）此乃臨于渡御于馬場之御一所屋西面之屋之
東北二方江
廻幕立屏風西南二方
懸置御簾乃御見物所也）競馬御覧也

●競馬次第

先樹御鉾六本　自馬出之木至勝負之木
次馬十四疋　自板倉周防守重宗　二十六許丈ヲヘ立ス
　　磯ニ人無居飼　　放出ス
左右各七疋牽分之次第
於休ル以東為左　以西為右　将右乗如式日ヲ
一番　左　大膳進本久猶　馬字　飛上（トビアガリ）
　　右　筑後守重次負　無纏頭　馬字　薩广（サツマ）
二番　左　冊後守清長負　無纏ル　馬字　大南部（ヲホナンブ）
　　右　淡路守氏守猶　馬字　黒河原毛（クロカハラケ）
三番　左　民ア少補清玄　持　馬字　南ア赤毛（ナンブカケ）
　　右　主税助保臺　持　馬字　太赤毛（フトカケ）

四番　左　右衛門大夫作顕　馬字　大坂河原毛（オホサカカハラケ）
　　右　内膳守鎮顕　持　馬字　加賀黒毛
五番　左　織部佑季金　馬字　大坂栗毛（クリケ）
　　右　長石大夫季芳　持　馬字　加賀赤毛
六番　左　捨大夫保專　馬字　大坂青毛
　　右　松千代大夫保臺　持　馬字　加賀芦毛（アシケ）
七番　左　小若大夫乞顕　馬字　白赤毛（シラカケ）
　　右　平大夫　飛顕　持　馬字　犬山（イヌヤマ）
階下之役人氏人二人　　土佐守有久束帯
左方鉦并禄

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

右方鼓并禄　　西市正福久来帯

各着幄中之冗子勤之　鉦鼓禄之役雖為別人今

今度依為臨時競馬而恒例之頓宮不営之雖

然准式日之著座神主左京大夫理久来帯別當

左京亮勇信　浄衣但依故障代三河守筭里生座　所司大膳権亮清宣

浄衣　月代大監物巫氏里　浄衣

各列座馬生之樹下　円座東上北面

自餘之社司氏人狩衣直垂混雑而馬場　去埒一許丈東

候了　各東面坐　円座　刀祢四十二人　各白衣　神人四十六人　各黄衣

傍埒而一行相并　芝居各東面但廟御所屋正面之通三許丈刀祢北行　神人南行

及辰下刻競馬事了社司氏人各退座次左右階下

并衆尻十四人相集於一鳥居正中向北一揖退歩了

次還幸社司氏人於酒殿橋之東頭各平伏　次

階下両人左右之衆尻名詰神前再拝而退矣

右衆尻袖料自惣中冬斗充給之賀茂雑

掌玄蕃助保矩　主計助忱直森治部大輔

用久御奉行板倉周防守重宗於埒馬出之所

有裁判其外若輩之衆十五人肩衣袴着之

候之

慶安二年九月十一日三院御幸之事一詳氏之

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305　　ガラス使用

日記 在家

●儲君行啓

儲君 菅宮 後光明院

或記曰寛永十九年五月一日丙申儲君 後光明院
行啓于賀茂社是為競馬御見物也路次經中
大路到于一鳥居給御桟敷小経所西集屋東之間
之儀式有御見物御座御簾屋東之間
競馬記云寛永十九年五月一日天晴 競馬第九次今
略之詳見競馬記

所西ニ立五日ニハ無御成

●中宮行啓

百練抄云白河天皇 永保二年正月廿五日中宮行啓
賀茂社 走舞人一負

●御幸社家亭

同抄云建保四年二月九日御幸鴨祢宜祐綱泉家
件所近御所 山城名勝志曰資綱泉亭元在松崎与下鴨
間至後世為田地之云
鳥居大路先祖家平カ館ヘ、後白河院雲分見玉ハントテ
御幸ナリ乍ラ詳ニ注進雑記ニ見ヘタリ

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

法皇 靈元院 御幸二ヶ度之列ニ在記

享保十三戊申年八月十五日 快晴 終覚院御幸之日
先御幸賀茂上社密儀之事 時神主重統所労不
出 法園ニ而出迎惣代季隆保堅着袴肩衣一
烏帽束邊而出迎惣代督久 神主不出 保礼無成
故歟也 保礼無成
保普一之月番輩雑掌共
所司代牧野河内守殿 法皇ニ而附武家ニ銭之
此度一烏帽子ニ而出迎ニ付案内之
子ニ而薄ニ而初る御幸 保方逐一ニ案内之
還幸 終覚院御幸之 御幸未下刻

国立国会図書館　　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305

ガラス使用

群記類鑑抄出
中

目錄
賀茂社記錄 第四十九冊
神寶
齋服
齋院
齋王
齋宮
齋王
齋院
齋宮
齋王
齋院
齋宮
齋王
齋院

群記類鑑抄出中
月錄
四月祭
競馬
祈願 付靈驗
神寶
國祭
臨時祭
衣服

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

群記類鈔抄出中

賀茂祭有関事

四月祭 中酉日 四月酉三ツアレハ中ノ酉ニツアレハ下酉ノ用

園大暦 寿四康永四年四月十九日天陰雨降或初晴

今日賀茂祭也上皇無御見物又依神輿神木事

小陣被置云々禁中依之尋記及晩仗々渡矣

路近傍使右少将 源顕方 伯々扶持 春宮使権大進

高階泰成 大炊寮ヨリ宛行加加ヨリ 右馬寮大江有維 仲直朝臣子 仲ハ加陽助ト

内蔵寮助高階房経 別当家人堂童昌ト今日ハ南ヨリ参ルト 山城介

惟宗助茂 舊直朝臣ヨリ 典侍 源資子 綾小路中納言室 資ハ頭ハ訪枝ト

検非違使左尉源氏頼志坂上明方只一人云々冷然

同記 承和四年四月記云 十九日自暁更陰今日
賀茂祭也依例如従使之及晩渡大路之近衛使
左少将捕氏 為弾正少弼也不具童之
春宮侯雅女乗親王餝車如例
西宮記曰賀茂祭前任官例
延喜五年四月五日任八人
同九年四月九日勅任三人
同十三年四月十五日任百四人 祭五日
天暦八年四月九日任四人
安和二年四月十一日任三人

小一条記 私云用下申酉初例也

天暦四年三月廿九日左大臣以下於陣頭議定賀茂
祭事外記勘申先例 元以下申酉日行此祭例雖
然准他祭下申酉日可行之由諸卿定申仍定其
定進物所膳部饗穢去廿日奏彼所之仍有此定
四月十七日有賀茂祭延引大祓
弘仁十年四月十四日辛酉賀茂祭初為中祀云々
日本後紀云弘仁十年三月甲午勅山城国愛宕郡
賀茂御祖并別雷二神之祭宜准中祀
件まつりとハ卯月の初申の日比叡乃まつりそ

其日迎ふる乃枝を賀茂つぎ次第ノ日
賀茂の乃あせ忌れいあるひを日吉重進せ給
ふ枝の枝まいり多日吹を葵と桂と挿頭
かくるやうなひえのまつりのそれ桂
そまいるをぬかよ法ろうけぬ吹を行ろ
といふは日人ああひかしく我かをはま多法
乃奥ふもかくるをみくらう
多といふ麓のこかあるき久ふもまきそへて
右和歌名所追考載 光海井栄雅

続日本紀孝五元明天皇和銅四年夏四月丙子朔乙
未詔賀茂祭日自今以後国司毎年親臨検察焉
花鳥餘情 藤裏葉 近衛殿つらさ比依小中将
をも賀茂祭春日祭乃使東遊を多くまつらるを
乃被安堵よりて心仕のいてゐもち又迎たち
まさるなく此儀あるゆゑ也

年中行事秘書云四月中酉日 賀茂祭事 廃務
使ゝ如春日祭
若翔日當酉下酉行之依用國祭後酉也
當日於南殿覧使ゝ餝馬

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

祭雖停止猶有奉幣
齋王雖輕服准齋宮例奉
宣賢御記云賀茂祭之山城使内藏使
等渡之近衛使内裏仗
て渡社之訖宣命を讀也山城使賀茂大明
神ハ當國乃地主之神之間其國司奉仕する也内
蔵使又淨衣大小乃事ハ同之間略する
春宮中宮依
奈向する也然ハ賀茂祭ハ嚴重乃神事檢非
違使判官も必淨衣
右宣賢記者寛永十六年八月廿五日ゟ於
彼淨家写之也敦直筆跡ゟ更之者也
民福筆記云社家傳云申つゝしめぬ間ハ間よなす
と云云心ハ今歳正保四年四月朔日申日也二日酉
廿日也故ゟ二番乃酉ハ十四日ゟ當ゟ申へゟ廿日祭
行つゝしめぬ間と云ものなり（社気乃内にをゝく）
ゟ入ゟ申酉とつゝしめぬ間也といへとも是間
ハ晦日申ゟ四月乃朔日酉也三月ゟ殘ゟ有ゟ申
中四月へ入申ハ入すてゟ三月ゟ殘ゟ有ゟ申
酉とつゝしめぬ間

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

とゝのなり若三月乃毎日申まして四月乃初
日両なりハ是申つきぬ両あるを初よりをハ
すて十三日より両まて二番まあるを五乃両に
迯を祭乃日と定るや是社家より口傳なり

同記云両日乃夜御戸開浦料を供す内舩乃
内料とゝく被皮ゟく舟を作を料を入十六艘
本社へ奉る舩ハ太田乃社へ奉る舩ハ金く十八艘

又同記云両日乃夜御還馬公家より走馬を
献らるゝ云々今ハ社家中まてもなり也
のみあるゝく還乃儀式を行昔ハ立願なを

かなゝく進すあるよ百疋ニあまるを事
多々ゝ也

西宮記云仁壽三一四一廿三一依京畿七道疱瘡穢賀
茂祭停止斎王名不奏但使国司供奉祭事名有
行使警固事不可・同四一四一十九一賀茂下社有
死穢仍勅使并斎王不参但警固如恒

・同記云應和九一三一十二一御記云高階ニ申云斎院供
奉祭日日記(二ヲイニ云)進止如何服輕(日記イ)仰外記令勘先例外記
奉正申云國史。等无所見案令式文。有服(親王イ)之ニ忩則
斎王不可参祭之又召神祇大小副蔵人所向之申云

斎王不忌軽服准此則可参祭又令公卿未定申之
准斎宮例参祭无妨之依
仰言陳朝旨了

同十五日四十八日斎院長官希世申斎内親王自昨
有月事仰外記令検先例所見召神祇大副安
則問斎宮例申云於離宮有月事不参外宮又於
外宮有月事不参内宮但所司(ノ)備幣物宮主所司(ノ)
持至河辺被其由(ノ)奠之斎院事非神祇官之所堅
之仰希世斎院参社事宜停止只於院令被停
止由又所設幣物依斎宮例院司宮主未相共於川辺

令被棄之 十九日己酉祭如常之只斎王不参社
頭之午剋使未令申向社之由覧使未餝馬従者了
命婦従人囲司未召南廊給禄(典侍於陣外未一剋
令申奈由)出南殿拝賀茂大神申斎王不参状並祈平安
同十九日四日未四日御記云使掌侍守子申有病忽
騎馬由殊許乗車

同廿二日四十七日大臣令申云職事之依先例下定
被行宣旨(忧イ)神祇官卜云有不浄気无慮之廿日於
建礼門前大祓依賀茂祭止也中納言櫛(ノ)令内
侍奏明日可警固事(上)依請未三日停祭依職也之

仁壽三年元慶六年不敬警固仁壽四年貞觀十一年
十六年昌泰三年亦皆有警固（延喜）同廿三年四月十六日
庚申於建礼門前修大祓依条止也中納言（令下）
内侍（カメ）奏可警固状依請例条前一日召仰警固事而
昨日公卿皆依物忌不参入不得行令（仰）間卅由申云延
木八年有申日召（仰）例（ノ）
同記云承和六年四月廿二日依鴨祭廃朝使并女使
亦騎馬度紫震殿前天暗覧了参東宮御覧了到
内蔵寮（ニ）将進菅之間自内裏使来仰云有（カ）紅下
之穢仍（ノ）略（イ）勅使并斎王忽停止（換故実内裏有穢彼
院不穢斎王猶参入
而此度不換記文忽（イ）
停斎王不可為例（ノ）山城國司依例条祀
同云天安三年四月廿日（ノ）条使依内穢停止又斎王
未定仍先供奉（ノ）
同云元慶五年四月廿日（ノ）鴨祭依涼閤不用哥舞（ニ）
同云天徳四（ニ）（誤応和元年）五月廿日御記云民部卿藤原（ノ）朝臣
外記朝望動申諸条有穢之時例文仰云平野廣瀬
龍田木条已有越月祭之例須以吉日令祭（ノ）
尾杜本當宗木以下申商可祭大神山科木祭依昌
泰二年例雖非卯已日以八日内穢後日可祭至于賀
茂祭依天暦四年例以下商可行之由仰了

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

九記云天德二年四月廿二日癸酉賀茂祭依有内裏
穢祭使不參内東宮使止依兩穢也
小一條記云天長八年四月十八日乙酉鴨祭在右馬寮
有穢仍仰親王公卿未并四門人馬用之云々
日本記畧云天祿二年四月十七日壬午賀茂神主秡
廿日乙酉賀茂祭 伊尹
今年九月廿六日摂政右大臣參宿賀茂社云々
旦之摂関賀茂詣之始也
同記畧云 後一条 万壽四年四月十三日癸未警固十五日乙酉
賀茂祭今日供奉使々不可有差葉者之由有
宣旨四位雜色人五位六人六位四人
薩戒記 應永廿二年三月十五日秉燭之後女房
奉書枝佐下賀茂祭女使可沙汰立之中可揮
佐之由 十六日丙戌朝召雨品晴祭典侍及勾當
仁存知之中分女房中院 廿一日辛卯天晴祭使
參按察(盛ん)大納言資家之仍送使者示要路之事
同四月一日辛丑雨降自今日始祭神事立札於門
依典侍出立也 賀茂祭神事也僧尼并重輕服
不淨輩不可入来 簡長加四寸 十四日甲寅天陰今日
相觸祭使禊身固之於在陽寮 在貞朝臣 用女房人

廿一日辛酉天晴賀茂祭也典侍僚子弟妹十歳自此亭出立近来一位新一位入道弟搏倫汰立之於予者雖不可類皮女人能汰去年已後當年廣橋一品薨也典侍自行家司前侍従宣光朝臣奉行之故九毎事申汰於祭者可有恩免之由頻申請之仍宣彼仰弟兼日雑事一在別記早旦家司紀豊弘（小舎人不参入尋汰法諸事又餝葵桂於御簾

以後女車出衣冠扇次典侍
歩衣張袴白生単裳上額内
唐衣尋常(私云腰帯カ)着之
前日仰在方々賀茂定菅勤仕之立八脚於西庭
其西方菅次第同如常
童女菜車相門前典侍菜車花苅宗富衣冠
寄之上臈女房着単袴持火取菜車後則有
門部駈一人矛但馬守重實也
行列 先前拂 次前駈 次車
次出車 次童女車 次手振四人
先參陣次渡列見及昏而了

廿九日己巳今日典侍參內用祭裝束

後崇光院御記云

嘉吉元年四月十七日賀茂祭也中暑氣人賀
桂毎年法儀也同十九日賀茂祭

中右記云寛治六年四月廿一日癸酉賀茂祭 廿二日甲戌
巳刻許上皇爲御見物有御幸紫野 先神館辺
留御車數兩御見物之殿下御神館齋王御所

清慎按すれば賀茂二季乃内祭兩日之事歟

のそれ行なう時吉日南よりなるゆへ後
仲住躑躅ヶ岡准して南を用ふるうんぬう（河海抄同ぐ云）奏氏本
系帳云欽明天皇御宇天下挙國風吹雨零尓時
勅下部伊吉若日子令卜乃賀茂神崇也擇四月
吉日馬繋鈴人蒙猪歩而駈馳以力祭祀能令
禱祈因之五穀成熟天下豊年茉馬始於此也
是國祭のそもとなり　除時祭いまの乃賀茂
祭ともや此御祭い字多天皇寛平元己酉年
十一月吉日ことにはめて行もる此事い詳ならく
いくばくもなく皇威のおとろへあらそをおもひて

ま
是すべて祭あるをしらでもなくておさ
しきよ冬乃祭をばへよとも告あらしますそ
の行ふをもあらい大よそのその式文の祭よ模をも
日うらも面を用ふるをこと争り上件文ぬまうの
本文よ文字を考さいをとのまうの面
も行ふまく夜の祭乃をもめも面ふ事を
しく志をぬきん日月乃祭い面二ある時い下
三うある時い本を用ふるもあとなるさうあるも
下乃面よ行ふる事ふる例あり此祭い面乃日な
らそい行ふたあしむこと又停止のそい後

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

一 あるゆへは四月一日よりあらたまる年は古来度々あり
しかともつねの中の四十三日の行道勇例なし一
年は何ともなきの四廿五日の小行道待つるの例更
のふ

仁寿二 天慶九 承元四 天元二 長暦三 長元
弘安元 康和元 日 五 木治元 日 四 長寛二

是皆四月廿五日の小行道やむことあるへ
し枚挙いとまあらさるによりて一つを記す
禄七年 御祭出来一日乃雨ふれる
八事保二日云年迄

一評定頼りし箱之内訴文参入二束第二雨ふれる
當社出祭之事ても来廿八日のてもあるへき
間云々の趣申さるるよし海て

後花園院御宇
享徳四年
後四月一日 秀頼判

賀茂神主殿

享徳四年四月廿二日御祭料
四月廿八日沙汰之

日本記略云 村上御宇 應和元年四月十四日丙午 神院禊
十五日丁未警固 十七日己酉 賀茂祭 十八日庚戌解陣

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

同記畧云天元元年四月十六日庚午賀茂祭王穢
（園韓神ノ字）
（申ノ日関白詣シ給ヒ）
十七日辛未警固　十八日壬申（関白頼忠）左大臣奏ス詣賀茂社
十九日癸酉賀茂祭申刻雷鳴雨水廿日甲戌解陣
（中午禊　中未警固　中申国祭　関白詣　中酉祭　中戌解陣）
（是定例ノ此余ニ能枚挙ス異例ホト多キニシテ）

忌竹

藻壁苧中年日御禊又云いとはして。神事なといさゝか俄心又門をよ竹まて
を分てはすをもゝとゝく
又云卯月祭　もゝ又云卯月のいとなる吾ことを新もれ

〔國祭　四月中申日
見林公事根元首書云祭ヲ神生ト云ヒ別雷命ノ生ル
ニ日也ト云実ハ申ノ日カ神生ヲ酉ノ日ハ神生ヲ祝フ義
ナルヘシ

藻壁苧云中申日又あれ　國祭

公事根元曰初度ハ日次ヲ云ひくし事有天禄二
年酉廿六日被改右大臣（伊尹公ノ諡号）諡徳公賀茂詣乃事有是
被定人忠賀茂祭乃事ハ必賀茂祭乃事ありて
車ゟて地下ゟ乗ゟ事なり上人乗ゟ
ハ必賀茂祭乃事ありて白ぬ乃御幣神

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

宝庫櫃やうのものをうけさせ笠(カサ)掛(カケ)といふものをもうけさせ上達部の車(クルマ)をつらね社頭にて神あそびあそび榊を採物にて冠をうごかすなどいとをかしく東遊をうたふ

[台記] 久寿元年四月二日甲申別詔賀茂詣定事

六日戊子禅閤自宇治渡御土御門依賀茂詣也

十四日丙申晴未始暴雨不及半時止須臾後雨須臾晴伝聞今日賀茂祭乗尻隆善之年日御禊来日警固申酉両日祭皆悉り可用下文之由大納言朝定卿伝宣別詔賀茂詣事 和銅

十九日辛丑雨剋参御所奉賀茂詣前駈文名

●東柱

[枕草紙] 石清水臨時祭の事をたうすのよ 義秀(よしひで) 殿(どの)の御(おほん)ありさまなどよ笛をふきさしてひやうしもて あるくほどを下略

前書 義秀殿のまへにてよ 義秀殿の和琴よ

仁寿殿のわたりよりて拾芥大内裏乃図よ清涼殿の丑寅のすみの角よりして 東北院 人々のまへにすゑたり 紫式部 日記 寛弘五年九月十一日 土御門殿 産養 三日 夜 丑寅 角 東北院 人々

上人壁下の庭よ岩(イワ)ほて仗舞人奇(クシ)とを召法従吉采
をもす舞人所乃前巫二人(カミ)を舁(カキ)て呉竹の
臺のもとよもろこ上舞人(カミノマヒビト)をめして一の舞を所
せ定らる舞人すみて殿(オホトノ)の舞をもめく先一乃
舞二人進出てよゝり三度舞あり舞人
上より退て竹臺の東よもろ次(カタ)ひこ
進て求子をまつり舞人下り退
く大比礼をかるて仗舞人退出て采香(ウネメ)
の馬道を経て建春門よりうろれよりか
すゝ川狩(カリ)要

うとをもろこひ 笏(シャク)茂乃時(トキ)の条(ジョウ)也(ナリ)定(サダメ)
ある神をゝゝしのよ新(アラタ)にて演(ヤラ)ふ舞(マヒ)也(ナリ)
うとをもの心 うと演(ヤラ)ふ舞(マヒ)也(ナリ)
ぬきれつるさもの 江次第曰祖(オヤ)右(ミギ)只(タヽ)袍(ホウ)袖許(カリ)不
祖(オヤ)に

又云(イフ)のひとすろまひ 舞(マヒ)也(ナリ)
首書に東遊(アヅマアソビ)也(ナリ)舞(マヒ)也(ナリ)
二ノ哥次(ツギ)歌(ウタ)は舞(マヒ)次(ツギ)求子(モトメコ) 次加太於呂之調子高
麗双調也

婦人(ヲミナ)舞(マヒ)ろろ一(ヒト)まよ東遊(アヅマアソビ)といふろい歌(ウタ)の

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

織田軍記曰天正二年五月廿日賀茂ノ祭競馬事
天下泰平ノ御祈禱ト云傳ヘ名
御馬ヲ庁舎ノ北ノ馬場ニ牽セシムルニ依テ信長公
ヲヽく勝軍ニ召レ給ル毛ノ御馬鹿毛ノ馬
其外駿馬ヲ相添二十疋ヲ庁舎ノ敷カイ具ケ
ツカウニ名物ヲ掛ラレ会人モ美ヲ盡シ出立
シメ黒装束ノ称至十人赤装束ノ称至十人右
二十疋ノ供馬ニ乗テ一番ニ
誉ノ駿足天下ノ壮観旬事力是ニカン

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』　請求記号 832-305
ガラス使用

賀茂競馬記曰　天正二年戊戌競馬乗尻事

一番　左　山城守宗久
右　筑前守久清

二〻　左　采女佑三久
右　肥後守保賢

三番　左　中務大夫光久
右　兵庫助保朝

四〻　左初　宮福寿保重
右　義法守清国

五〻　左　何波守重政
右初　右京亮

六〻　右　出雲守氏友
左　治部少輔守祐幸

七〻　左　治部少輔守氏頼
右　因幡守季泰

八〻　右　信濃守処重

九番　左　壱岐守親生
右　若狭守義賢

十番　左　出雲守氏敏
右　修理亮

右件社務森尊久小司大夫古老を召守代秀頼目代宮内丞両日共両隆織田若狭守見物也惣中より一献宗御馬両日共ニ信長卿より条一疋かいくけつこそ三番中勢大夫兵庫助あやみ出立かいより出ありけるこそ一かいより出ありけるをさすてに乗るをあれともの

中勢大夫負兵庫助已下
賀茂競馬記者倫前守秀顕朝臣記之見此記
天正二年則秀記勤仕之
下学集云埒馬垣也日本俗作埒誤也
玉藻建暦二年三月廿五日今日院御所賀茂
社来廿七日可有競馬之云々廿七日今日於賀茂
下上社有五番競馬之後先例於下社有競
上社以勝方歩数而今度有議於上社更有
競騎之云々希代之例也
番折紙在之略之云々

私云氏純家之家人自兼競馬番折紙以時
之事也

氏福筆記云五月五日に雨ふれハ社司氏
人おそれて左右乃菜屋ハ床几ハ腰をかく
名神ハ座す左右の華木屋ハ床几ハ腰をかく
ゐや自本乱絃のつらすをぬく事なし今歳
正保四年五月まで終日雨降左方斗馬揚乃
屋へ上る事ハ非例也

日本記畧 後一条院 長元四年四月廿六日癸卯
開白左大臣奉賀茂社奉競馬事

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

藻塩草云ふものそ〳〵ハ一てう大宮左をのこら場
をてそ〳〵ゑ洞院や　上下略し

老懸

・民禄語云老懸ハモト鬢ノ髪ハケ乱ラヌホヒテカクス
タメヨリヲコルナトソ鬢ノ飾ニ今鞦ノ能ニ用ル心モ
面白シ

・古今和哥集春上　素三条のたゐひまうちきみ
学士並ぬかてよ梅花折てうさむおいらくや
常こやど〳〵蔦ハ哥の心ソ（さる）
・又夫木七　山家百首

源仲正

おきふしさひけふれむりにさうつるあひのそ〳〵
おいらみけるて

蒼蔵（カクス）老髪

・和名抄云綟（ソヒカケ）女　兼名苑云綾女儒誰反与薙同一名老繫和名冠乃
于一云保久須介（カムリノヲ）ホクスケ或説云老人髪落以此繫冠使
又云於以加計
不堕故名老繫也今不論老少武官皆用之
・定基卿云唐ニテハ貂（テウセン）蟬トテ貂（テウ）トヲ云ケモノ毛ヲケ井
又清潔ノモノ之故ニ此貂ノ尾ヲ以テ之ヲ作ルサテ蟬ノ
形ヲツイカケニツクル故ニ云ヒ是侍臣ノカムルモノ之冠
ノカサリ之此事漢官儀ニ見タリ

頓宮　氏禄按本宮ノ頓宮ニアラス行幸ノタメノ
頓宮ナラントソ又連久説許院トミル
枕草紙云まのそらくるうんを二人ちからくひさあて
てまのいるる
育書云落蹲高麗一越調の手也納蘇利と
いつる五月六日乃競馬の日雅樂寮元
を奏するより花鳥館情よあり
馬毛
駒馬　訓蒙圀彙ニ總アシケノムマ、駒同
説文云駒音駒漢語抄云駒青馬也黄駒馬也葦花毛
日本紀私記云義太良乎乃宇萬

青白雑毛馬也
桃花馬
辨色立成ニ云桃花馬紅花
青驪馬
唐韻云騮火呂反漢語抄ニ云鉄駒馬青驪馬今之
鉄駒馬也　久路美度利能字麻
連銭駒
尓雅注云色有深浅斑駁謂之連銭駒漢語抄ニ云連
銭駒虎毛
驃馬　馬也一云駵馬駵音余又云薄漢ニ馬
今案ニ俗ニ云連銭葦毛是ヲ云
附赤驃

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

カケ

騆馬（カケ）

說文云驃毘召反漢語抄云驃馬白鹿毛也赤驃馬赤鹿毛也黃馬同上 黃白色馬也

尒雅注云騆（カケ）音花漢語抄云騆馬鹿毛馬也 淺黃色馬也

騮馬（リウ）附紫馬

毛詩注云騮（リウ）音留漢語抄云騮馬（カケ）鹿毛也黃騮（カケ）赤栗毛也紫騮（カケ）黑栗毛也

赤身黑鬣馬也唐韻云騮（リウ）羊朱反辨色立成云紫馬（カケ）栗毛也

クリケ

名

驪馬

毛詩注云驪音離漢語抄云驪馬黑毛馬也 純黑馬也

騅（スイ）附葵（メイ）

毛詩注云騅音錐漢語抄云騅馬（カケ）蒼白雜毛馬也尒雅

子スミケ

アシ毛

注云葵騅今按葵者蘆初生（メイ）也吐敢反俗云葦毛是 青白如葵色也

赭白馬

毛詩注云駁音駁漢語抄云赭白馬（カケ）鴾毛也今按鴾（ツキケ）字未詳

彤（トウ）白雜毛馬也尒雅注云駁（ハク）今之赭白馬也

ツキゲ

赤ツキ毛

駱（ラク）馬

毛詩注云駱音落漢語抄云駱馬沙駱馬（カウケ）黑川原（カウ）毛也

カウ毛

名カウ毛

馬也

カス毛

油馬

辨色立成云油馬糟（カス）毛馬也

アカ毛

騂（セイ）馬附赤騂

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

唐韻云騂 立征漢語抄云騂馬赤騂山鳥赤毛馬也騂音華 馬赤色也

戴星馬 ホシツキノムマ

尓雅注云白顛一名的顙俗呼為戴星馬 和名字比太非能無麻

落星馬 ホシツキノムマ

楊氏漢語抄云落星馬保之豆岐乃宇萬 下学集落星馬 ホシツキノムマ

驓馬 シシロノムマ

唐韻云驓 音狼漢語抄云多之路能宇麻 馬尾白也

駄馬 ブチムマ 訓蒙圖彙ニ駁同

説文云駁 補阜又駁馬俗云布知 不純色馬也

騅馬 アシブチ 踏雪馬附

サビツキ毛 ヨツジロ ヒバリ毛 ハタラ

宿鞠毛 サビツキケ 雪踹 雲雀毛 ヒバリゲ

鶉毛 ヒバリゲ 斑 ハタラ 見下学集

細馬 ホソキ

枕草紙云ろゆくりなき中よりいもうち出きたる 毛色ヽ

まだらむま 斑ムマ 芦毛白駒ヽ 足

いとくろきが 宿 乃わらはなどよりもろきかみ尾 髪尾 フリガミ

みともいふばかりなき 尾ナドモ白キヲヽ身ハ黒キ馬ナンヘ

尓雅注云四蹄皆白曰騵 音僧俗云阿之布知

也四蹄皆白曰騘 音前 蹢 蹄也俗呼為踏雪馬

已上見和名抄

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305

ガラス使用

注ゆゐみ八雲云馬九髮白キ小船恒集ヨリ九毛ヲ
淡ラ寺の中よゆゐミ
忘もれいやせこうすゝ
おすかゆうな

鋒之事
台記 久安三年九月廿三日甲申晴午刻參馬場殿先是兩帰鳥羽宿所
廿四日乙酉晴午刻參馬場殿先是兩院及皇后
前斉院御船後之有七番競馬中署六番左番
長下毛野忠俊右番長秦公正公正馬進共取而
於馬場末無将所公正落故為忠俊勝人以為倫頭
左大將曰未剋以前止馬於此年其程人疑忠俊為院御随身故歟爾始変了帰休
但今日不立杵大將推言之
庐与女房同車帰京云々
賀茂有職抄云競馬移鞍
西宮記 競馬朝廷之儀
康保二年六月七日於弘徽殿有競馬事
細殿庇南第四間大床子以為平守平両親王為左
右頭公卿不依石候細殿南二間次皇太子候細殿
南五間以簾為庇次伊尹朝臣参左参右参依各親王別當也左右馬各三疋騎小童著天冠錦半臂袴同掖腰等

自屋垣前上南　左入弘徽殿南中門
右入飛香舎東南門
安親（遣為）近馬出勅使理出（遣）標下　両人跪美仰各向勅使座
芳舎東（三）中門間　樂一町立標杵二竿（之）於簀子南砌標勅使在簀
登花殿細殿之下次左右馬競走左勝奏陵王（小童舞之）
舞了勝方念人藤原云云以下進拝舞了各退入
酒肴給大子及公卿左右雑伎小童騎馬南上二馳下
次作物所立毬（毬門ヨリイニ）童歩行進列立首原云云投毬子惣十度
右勝左右樂人随勝奏乱聲了
同記云　諸家出馬裝束
裲襠　接腰　錦袴　手纏　足纏　倭鞍　赤袍　倭鞍
菖蒲形　杏葉　雲珠　尾袋　童着天冠　無手纏
足纏　倭鞍
同記云五月六日競馬諸家出馬
手纏菖蒲靴　尾袋　杏葉雲珠（ウズ）倭鞍臨時節
出馬如近衛府乗尻　弘仁御後諸大夫出馬無纓
冠縫掖黄衣下襲　掃蝿　倭鞍唐尾御服劔
王卿以下裝束又皆如駒牽日但左右十列騎尻
者袂額錦歩懸　接腰　并両面袴　同左右　奥歌尻
鞘也
春日詣之事
台記春日詣別記仁平三年十一月廿五日庚戌舎人

左右芽刕着
飛香舎東
北中門内座
朋
右十五字一本
在樂所上

之中有院殿上人昇之保延五年禅閤八幡賀茂競馬之例之

廿六日辛亥晴今日詣春日云々競馬衆尻立人相双騎馬一下臈為先依番次平文移連着鞦無鈴（ナシ）鞦尾冠绥（フモソ）已上私儲之 未額赤 鬲尾（シリカキ）赤地錦 接腰（セビヨ）赤地錦 退紅布袍 無文 紅生衣 蒿昏乱緒 塗鞭 私儲之 右冠绥已上私儲之 未額赤 鬲尾（シリカキ）赤地錦 接腰青地錦 塗鞭 私儲之 蒿昏乱緒 塗鞭（ナタノ） 私儲之 熊皮 私儲之 尻鞘 地赤盃唐皮文 懸緒 江手衣簿為 押堅食文

将軍御他界之年競馬被行事

重村記云慶安四年四月廿日大樹御他界因茲五月朔日五日両日競馬之事於有先例者可有之旨有被倉局防守許被申渡于社家雖然無先例之間許申此由之処至于四月廿日無此沙汰仍又自周防守二条殿家司旧記雨見之趣被尋問之間則将軍家御他界之時神祭等被執行先例

将軍家

長徳院殿

応永廿二年三月廿七日他界

同年五月朔日　祈年穀奉幣被行之也
萬松院殿
天文十九年五月四日他界
同月朔日　日吉之祭有之
右之通自二条殿書付被遣之間両日之競馬
不及延引之沙汰被執行也但御奉行之御馬毎
不司之馬不出事
年雖被加之依仲子細當年者於御馬者不被
出警固之輩者被加之也
依両儀奉幣於神殿有之事
五月者依大両左右無屋之奉幣於神殿有之

初条ニ人俄ニ故障ニ付テ初条ニ
宝永四年五月五日初条殿之内門西ニ清周初条也。雖
然五月朔日姉善子氏芳妻卒去也。善称ニ姉已後ニ自身
雖不業其身忌中ニ初条事如何先例ニ不覚ニ
先所司許ヘ使ノ任元許ニ昌ニ有屋及晩庭
席元ニ集會評儀ニ上其身忌中ニ初条ニ変之於清周者明年
但馬守清常初条ニ初条ニ忌中ニ成ニ
初条ニ答ニ之ニ被ニ仰ニ忌中ニ成ニ初条ニ
不苦其儀ニ初条ニ先例有ニ之ニ也ニ或人語ニ之
宝永五年三月八日　内裏ニ競馬ニ
競馬不司警固出馬ニ不ニ異例ニ社司神事ニ
例

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

元禄十年五月 将軍綱吉公之母公 三九御方 光子 競馬鞍
腎具奈尻装束 潜下於衣等二十疋令御寄進
續日本後紀巻第四 仁明天皇 承和二年四月甲辰
天皇御武徳殿観覧左右馬寮御馬 也 應供奉
五日節者惣奉於此 五月己酉天皇御武徳殿
觀馬射庚戌亦御同殿覧種々馬藝 とゝ多
五日乃節よ奉る事をものハをへてあるよ幸を
とゝもにむつまじく朝廷よも忌振乃心ゆるとゝ多
私云忌振 五月朔日行之有障二日に被行事も前代
有し五日乃馬足ゆ遷速を定めんう多めなり

清茂按當社競馬ハ掘河院寛治七年ニ院安房葛尾
の根切をもよう事をもてまるよう古系図よ見多
朝廷よ行奉る競馬を当社ゆ奉ることもなきてす
当社よゆこゝ迄なるまゆる事ハ公家の衰もゝさう
さゝのまゆあるき社能又ハ公家のさゝやかなきいまの
もゝこゝ迄らもなるのわきまへもなく
多ゝ迄一のハゝ多のまゆの遅速をあらみく
当社を定多まゝ足多ゝ多ゝ多ゝ多ゝ多ゝ
かきりくる事とも覚ゆらもそれハ一日よ雨ゆれ
ハ二日よ行奉てゝたゆりもなりちゝ比ハ

長興宿祢記云文明九年五月五日雨下競馬疋引
廿二日今日賀茂競馬也 式日延引 室町殿御成御見物
中略 御桟敷被構観音堂 中略 事訖於西賀茂
上騰寺 御酒宴自山金吾雑掌申沙汰也 下略

親長記云文明十年五月一日雨下霖雨今日賀茂定
調延引依雨云々 二日雨下時々晴昨日依雨等賀
茂足朝今日有之云々

二水記云大永六年六月十日午時賀茂競馬足 以下
令見物 式日依觸穢延引 近邊之衆誘引了於経所有
一盞神光院振舞也

●競馬疋引例

親長記 自筆記 云文明九年五月五日甚雨下今
日競馬疋引之由有風聞之間細
雨下賀茂競馬旨被張行云々室町殿御見物之
故云々 去五日作疋引云々陵遲之至云々

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

賀茂社家記云廃朝廢務之時賀茂社云々
競馬延引之例
大永六丙戌年四月七日　後柏原院崩御
于時競馬延引　六月朔日五日競馬有之
私云与二水記日並按二水記十一日十五日トアリ可従之

〇臨時祭
公事根元曰十一月賀茂臨時祭下酉日　先奏聞
試楽頻繁なという事有之故の儀式御禊等の荘厳
とも清涼殿にて行之乃後も清涼殿よりこれを引直衣にて
乃後も清涼殿よりこれを覧る（江次第ニ摂
とある事也（縣瀬處也一里第伐無願
乃庭南より二行に舞人陪従
し次小舞未乃神楽の
御前をこえ始あり
下より下臈まで

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

あるも屈撓ずうしてもの
必ずもを為ん為あるべき事ありて（松風巻河海抄通俗舎人随身也神楽人長被下役之）
をもて祓有るこの条乃おこなひ
始とありしと記るもしかり給けるか故の大祓
先年絶て断叶ふ事をなきよし
なから四事絶らも御ひつゝ
それなくあるてやとて
あらくなくしてねのめ
給れい寛平元年十一月
たまふ其時のはらへ年完乃大祓時平公いまし
```

```
ねまそはと免たまひきりとそん
（園大殿 寛和四年十二月廿五日薨
（伝代始公卿使事
傳聞今日賀茂除時祭也依代始公卿使也新宰相長
頭朝臣勤之下略
（中務内侍日記云十二月廿日 永安七年八月廿日 九年六月廿日 不遂
乾元宰相中将せいとやう
のちもつゝしのはもくう
いうもう事ちひまいてれ
それはれをいありていよはーとも
はせのふりくいまひとそ
```

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用
```

利くてあけめるにやそて還てうちれいこのこひ、
はひきをせいくさをおもひよりをよま
ひ人の橘をくくまんちやうひやうしふひえ
きるなりをそんのおそこくやうくねをゆく
えれえ死なのいてひはくをてうをなくおも
ーろー

日本記畧長和五年十二月十四日甲申賀茂俗時祭去
月依大嘗會延引奏議頼定卿為役四位四人五位四人
六位二人為舞人
寛平初記云
寛平元年十一月廿日始時北祭有之此時為祭
使行諒(ス)二東遊歌(ノ)
ちやかなの社の姫小松乃代ふそ色そかくしる
此歌古今集入更衣乃詞書乃事
君こ君を撰してもろこと父御門の寛
平のおほむ乃年を祝て求奉の給
頭よ戴仕ることを
花鳥餘情 や海あいるの竹のふし
賀茂祭時祭事人行文青摺袍蒲萄染下襲
地摺袴合袴陪従擬階文青摺袍柳色下襲
白表袴合大口赤純半臂引帯ホ名同并く

国立国会図書館　タイトル『賀茂社記録. 第49冊』 請求記号 832-305
ガラス使用

宇多院門出給ふ事

世継物語云今むかし小松の御門位をも譲和
乃みこ位を給てのち小松の帝とて内裏
くらゐをもなくて生給
ますほどもちかくさぶらひ
なれたる人たちこれ
おもき事をば位
へきよしのりもあるべしなんとおぼしめし
左京職乃ちかくなんたてられをも
そもそも乃玉殿十給二帝小松
生給ふ御事をなくおもひしきよ
位給てい給ひ
よはひ位給てきこえ
しさるべきにやとおぼしめし
きこえさせ給ふ
かくさぶらひ
よろこび給ひまかくなるに閑白殿を
と践祚給ふ
しめて奉らせ給ふ
いき生給ふかれとも践祚